女學雜誌

第二百五十四號
明治二十四年二月廿八日發兌

愛情色情辨

女教師　戸川殘花

教育上の僞善、瑣國

感謝念　磯貝雲峯

漢學格調辨

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 254. FEBRUARY, 28TH. 1891.

第二百五十四號目次

EDITORIAL:
Hypocricy on Education.
MISCELLANEOUS:—On Chinese. (Tenchishi). The Deaths of Noted men. Mrs. Booth. The mother of the "Salvation Army." Repentence. A Letter to a friend in a foreign country, (Unpōshi). A Various degrees of Heat.
HOUSEHOLD SCIENCE:
Question of the Household Science. Miss .... view. (Yukiko).
NOVEL:—"Fuunkio." (continued) (Unposhi).
PHYSIC:—Why Night air is unhealthy. The Situation of the Bed Room. The Non conducting properties of Air. The Damp Air. Our sensation of heat is an Unreliable Guide. (Yoshida Shinko).
HUMOUROUS:—Whose field? (Fumiko).
CRITICAL NOTES:
LITERATURE:—Japanese Poems.
CONTRIBUTED ARTICLES:—On Love.
NOTES AND NEWS.
CORRESPONDENCES.
CONCERNING WOMEN.

社説　教育上の僞善、鎖國論
雜録　漢學辨中(天知子)○名高き人の逝去○救世軍の母、ブース夫人○懺悔、墨江の友に贈る(雲峯子)さま〳〵の温度
家政　家政問題(上)ワード、ハウ女史の意見(ゆき子)
小説　浮雲胸第五回(雲峯子)
理學　夜の空氣人を害する譯○寐室の位置○空氣の不導熱性○濕りたる空氣感覺は温度を知るの便さならず(吉田伸子)
隨感　小學女教師(戸川殘花)
笑草　誰が田(ふみ子)
批評　幾多韻文論
文學　和歌數首
寄書　色情、愛情辨(Y.T.)
時事　條公薨す○廢娼建議○女子高等師範學校○婦人國を維持す○鉄砲傳來(?)英國女皇新年の年玉
問答
通信
女報
週報
物價

(1.) *Formerly, there has been great prejudice against employing women, but lately arrangements have been made with the Imperial Post and Telegraph Offices, where by they may be employed on equal footing with other employees.*

(2.) *In the Medical Department of the University the professors have lately originated the plan of collecting scrapes of paper and cloth and selling them:—The proceeds to be used toward the support of orphans.*

(3.) *The Empress proposes to call all of the Kōzoku, or descendants of the royal line, over eighty years of age, to the Palace, and, furnish them with Mawata, or floss silk, as a protection from the cold.*

(4.) *It is arranged, that the petition for abolishing prostitution will be presented to the Diet to-morrow, Feb. 26th. The signers of the petition are of three classes: First, men only, numbering 628 names. Second, women only, numbering 525 names. The third class consits, of those who wish to petition further, that the power of the ballot be taken away from all owning houses of prostitution. The number of signers to this last petition is not definitely known, but will be ascertained and published at an early day.*

(5.) *Lately, the Graduating Class in Stenography of the Meiji Jo Gakkō recieved their examination and diplomas. On the 21 instant, four of the class reported a lecture by the Principal, Mr. Iwamoto. The lecture was written out and given in good form to the audience, who were well pleased with the skill and dispatch shown, and highly complimented both teachers and students.*

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百五十四號
明治二十四年二月廿八日發兌

社説

教育上の偽善、鎖國論

太甚はだしき哉偽善の通弊。滔々として天下に横流し、洪水の全地に溢るゝが如し。彼の迷へるものは尚ほ論すべし、誤まれる者は亦た悔ゆるの日あらんとす、但だ夫れ内に腐れたる醜骨を藏し、表てに色を令くして紅顔を粧ふの偽善者に至りては、鞭を擧げて叱咤酷撻するの外ある可らず。教育社界に於ける此通弊亦た天を燎かんとするの狀あるを見て、慷歎痛息極まる所ろを覺らず。

曩の年、西洋熱學びの海に押寄せ、學校講堂ひたすらに之れに泳がんことを祈りける、是れ痛ましき弊害たりしに相違なき也。反動の風起りて國粹保存と云へる聲を叫び廻る、是れ亦た一部分の眞理あるものと云つべし。一去一來して下げ振の彼方此方にさまよふが如きは、蓋し時勢の常にして凡俗に在觸れたる事なるのみ、面しろからぬ現象なりとは云へ更に驚べき事にあらず。然れども堂々として教育者たることを自任し、天下の重きを荷ふて万世の礎を置かんとする、先生、其人たらんとするものにして、たゞ粉殼の風に吹かるゝが如くあらんは、何如なる事ぞ。左れど、其弱點は必らずしも責めじ、但だ此の弱點を裝ほふて、時と共に化粧を一變し、滔然脱化して、時勢々々の愛國者たる面色を現はし、洞空の腹、死せる聲きを口より發して、稱して慷慨悲憤すと思ふの小人原に至りては、吾人之を見るだに心地よからず。

國民新聞が報ずる所ろに據れば、宇都宮に於ける知名の教育者某、紀元節に一場の演説を催ふし、何事をか辨じたるよし。夫は固より擇はざる所ろなり。其時來會したる聽衆中に女學生幾十名ありて、頭らに束髮を結びければ、彼の某先生は憤然として、慷慨し、抑そも束髮は國躰を害するものなりとて太甚しく痛罵したり。女學生等驚ろくこと一と方ならず、翌る日より直ちに其結び樣を變へたりとぞ。束髮は何故に國躰に害ありや。試みに問はん、其某先生自身は、常時果して、チ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ヨンまげに結び、上下を着け、白足袋を穿ち、肅々として古武士の如き樣にてありし乎何如ん。男子が散髪と洋服と靴とは國躰に宜し、而して女子が束髪は大ひに國躰に害ありと云ふ、是れ所云る痴人が狂語にあらずや、痴人が狂語は顧みずして可なり、但だ如此き僞善論なべて教育社界に行はれんとするの流行は棄置きがたし。

又、府下に於ける一大官立學校の校長は、校内の倫理室を〆縄張り、御幣建かけぬ迄に尊とみ恐しこみ、去る頃ろ、其室内にて音樂會を催ふし、男女打よりて唱歌を歌ひたりと云ふの故を以て、憤然として怒り（果して眞に怒りしか否やは知らず、吾人はたゞ其外形を傳聞せしまゝに叙述す）、以後一週間之を閉鎖して、悪氣を拂ひ去り清め去れりと云へり。音樂唱歌は果して汚らはしきものなる乎、吾人は文部次官が帝國議會に於ける演説によりて其然らざることを辨知す。男女共に歌を歌ふことは不道徳なりや、吾人は政府の音樂學校に於て斯る事の常に行はるゝを觀、必らず然らざるとを確認す。某校長が之を汚らわしとするは果して如何ある事由ぞ。之を馬鹿々々しきとなりと一笑し去らんとせば、則はち一笑了するとを得べし。左れど斯る僞善策の滔々として行われんとする大勢は、默過せしむべきものにあらず。

又、同邊の教頭は、教育上の　勅文を捧げて之に禮拜せしめたり。吾人は　勅諭を重んじ　御親筆を敬するに於て、敢て人後に立たざるもの也。然れども、學校に於て只だ外式上之に向つて一拜一禮せしむるが如きは、教育上の得策にあらざるとを斷信す。但し得失利害の論は再たび茲に言はず、抑そも教頭が之を重んずるの覺悟何如んと問へば、彼　勅文の意義を解釋するとを好まず、之を論辨するとは固より好まず、直ちに之を本尊として、之を信心せんとすと云ふ。彼輩嘗ては書生を集めて演説すらく、諸君もし之に背かば諸君の罪あり直ちに退校すべし、自身及び教員中之に對し不都合あらば、余自己の罪なり、余は切腹すべしと。吾人は、本尊と云ひ、信心と云ひ、切腹と云ふの語は、宛然執迷の胸量を示して、教育上、其の感化の毒大ひならんとを恐る。然れども、之を論極せんは本題の旨とする所ろに非ず。彼輩が如此き告白及處置は吾人が元より贊成せざる所なり。左れど彼若し衷心如此く確信確認すと云はゞ、吾人は寧しろ其志の嘉みす可

きとを思はんとす。然るに、吾人は亦之を聞く、所云る勅文禮拜の事は、眞意如此き崇敬謹重の念ひありてにあらず、一種の政略なり、たゞ諸生を一統し、國粋保存の氣象を製造せんが爲のポリシーなりと。而して其の確かに此の初念より發したるの證跡は、吾人必要あるに際し、之を列擧せんとす。

嗚呼、學校に於て勅文を禮拜するの事、策の得たるものにあらず、然れども得失の論は問題の尚ほ些々たるものなり、心之を思はず、外面欺むき装ほひ、矯僞を併せて慷慨を製造し、巧みに愛國忠君の躰を假作するに至りては、僞善の所行、醜汚を極めたるものと云つべし。

夫れ西洋熱に狂ふものは固より退治せずんばある可らず。然れども之が爲めに、衷心思はざるほどに國粋熱を發揚し、人を激せんが爲めに、徒らに分外の慷慨を装ほふに至りては、影響膨大、遂に驚ろくべき終末を現じ來らんとす。板垣伯嘗に言はく、英雄の末路は壯士に制せらるゝものなりと。是れ宛かも能く、虚飾的主動者が末路を訴へ出したるものなる哉。其の所云る英雄なる者は初め徒らに少年を鼓舞し、溝を渡らんが爲めに海を說き、丘を越へんが爲に大山を指ざし、千百を以て十一の果を收めんとを欲す、此に於てか議論常に空大洞深なり。英雄氏、當時末路の悲しむべきとを知らんや。圖らざりき、少年が血性は老朽に近き古英雄の腸に異なり、勃然激隆、豈たゞ海と大山とのみならんや、將に巨洋を渡り、高天に登らんとす、此に於てか、英雄氏、亦た之を制すると能はず、爾に出るもの爾に反りて、神輿一旦擔ぎ上げられて暫らくして放り出さる、英雄の末路則はち如此し。藤東湖、老西鄕等が終末の之に瀕したるとを思ふ時は、眇たる小人輩が、僞製慷慨の終焉、遂に之を以て打止めとなすは、尤ともの事なり。

左れば、今の國粋保存熱を激揚し、只だおほぎに煽ぎ立んとする面々は、宜く、維新前、鎖國開國論の矛盾したる當時を想ひ起すべし。想起せよ、當日の鎖國攘夷論者何んぞ必らずしも、皆な頑固石の如くならんや、彼等すでに心中宇内の大勢を洞察せり、滔々として打寄せ來る天下文明の餘波は、二千年來桃源に閉ざしたる門戸をも尚ほ打破らんとす。彼等夙に之を知れり。知つて而して尚ほ僞はり装ほひ、敢て少年を鼓舞せんが爲めに、心に無き虚言を吐けり。「明君一斑」に於

ける水戸中納言、「新論」に於ける會澤憩齋は、激烈なる攘夷家のみ、安くんぞ知らん、其中心は未だ如此くならず、自然、思ひを吐く所ろに至れば。

天下の氣運大に變じて復た昔日の鎖國を永續すべきに非ず僕は久しく攘夷の説を天下に公唱す今に至り忽然開港說を言ふべきに非ず卿は年倘ほ少壯なれば他年開交の時に盡力あらんとを望む。

あゝ何んぞ其辭の悲しきや、然れども彼輩大丈夫の勇を倚つて、其衷心を公衆に辨ずると能はず、此に於て席下の麹は沸々として彌よ醸もし、遂に水戸藩内正姦兩黨の私鬪になり、葛のもつれ久しく解けず、一斷して枝幹ともに絶へ、水藩の人物長久へに滅しぬ。あゝ是れ少年を敎育するものが最初の僞善より發し來るの荼毒にあらずや。

啻に一藩の少年を誤まるのみにあらず、之が爲に恐れ多くも帝室を弄そび奉まつり、陛下の宣言をして前后二つあるが如く民に感悟せしむるに至れり。文久三年四月、京宮より幕府に勅あり、五月十日を期し外夷を拒絶せよと。然れども常時の景勢到底此命を奉ずると能はず、遂に一橋中納言をして、

抑も當今攘夷不被行形勢は熟知仕候得共、天機一發綸言汗の如く、開鎖の利害今又再陳す可らず、武臣の職を盡し一死を期し候て東歸に及び候處ろ、奸說紛々意外の大嫌疑を生じ、百事成る可らざる形勢に付當職御免願候……

の悲聲を發せしむるに至りぬ。七月　天皇、大和に行幸、春日山に於て親征の軍議あらんとするの旨勅あり。然るに、翌る文久四年、　天皇、將軍諸侯伯に勅し、

豈料んや藤原實美等、鄙野匹夫の暴說を信用し宇內の形勢を察せず國家の危殆を思はず朕が命を矯て輕卒に攘夷の令を布告し妄りに討幕の師を興さんとし長門宰相の暴臣の如き其主を愚弄し故なきに夷船を砲擊し幕使を暗殺す　如此狂暴の輩　必罰せずんばある可らず

との綸言ありぬ。嗚呼、前后如此きに至らしめたるもの、製造的主動者が僞善虛言の不忠に由らずんばあらず。爾來幾多の名士か、製造したる鎖國論者の刃に倒れたる、神洲近世多くの偉人を失なへり、必竟其元は主動者が僞善にして激烈を裝ほひたるの言行に發せざるは無し。

四

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

近く一事を想起せよ、森文部大臣が、一書生の爲に刺殺されたるは、抑そも何の故ぞ。國粹保存熱狂るへる迄に激揚し、暴りに改進教育を嫌忌したるの由縁にあらずや、心になき似而非慷慨を飾るもの深く儆戒すべし。

何事につけ、改進と保守とあるべし。教育にも亦之れあるは怪しむを要せざるもの也。但だ改進者は改進論を爲し、保守者は保守論を爲すべし、論を引延して、帝室の事に附着せしめ、暴りに事を弄して、陛下の尊嚴を利用す可らず。不忠之よりも太甚しきは無し。大道を確守し、宇内の通義に則とり、人間當然の主義を守り、愛國に兼ぬるに仁義を重んずるもの、果して帝室と國家とに不忠なりや。

人互ひに意見を異にす、其面目に異論を闘かはすは、好まし
きと也、然るに彼の一種の教育者、心中未だ確信する所ろあらずして、外面に忠君を飾り、口に意味なき禮辭を重ねて、陛下に忠なりと言ふ、而して其私かに人に告ぐる所ろによれば、之れポリシーなり、利用する也と云ふ、何等不忠不正の極ぞ。あゝ少年は無邪氣にして水の如し、彼等何んぞ人の腹中を知らん、たゞ口に開く所ろを耳に聞きて、

チー、毒惡！、汝ち既に歩み出せり、須からく行く所迄行け！。

と冷語する毒音を聽くと能はず、未だ染らず未だ曲らざるの潔白心身を、僞善教育家が手中に弄々せられ、善意伸びず、悪習凝つて則はち一種の癖人物と化生し去らる。何等痛心の事ぞ。青年よ、青年よ、吾人が眞意も聞くべきあらば、乞ふ心を平らかにして靜かに聞け。大道に僞はりなく、主義に曲ぐるよ能はず、もし生ける證人を必要とせば、吾人が胸を叩け、吾人が胸を叩け、泥々の血、言はざるの傷、唇を開いて熱血を灑ぎ辯ぜんとす。

雜録

漢學辨（中）

形容虛文

星野天知子

漢文字には形容の文句多くは虛大にして質を失するもの多しとの說、是れ字句拘泥に次での第二の非難なり。尤もなりと言ふべし。然れども之れ亦極端の淺論にして未だ漢學を見徹せし者と言ふ可らず。抑々音聲なるものは思想を交通するに

最も適するものにして、是れより發達して言語と成り文字と成り文章と成る、故に能辨好文と言ふものには好調感響なるもの甚だ力あるを知るならん、修辭學に所謂風調又は感響（文字の調子好き事と話し聲の感動の事なり）と言ふもの是れなり。支那語は同音甚だ多けれども其響き方に由りて能く判別するが如く、支那文字は感響に於て甚だ發達をきたしたり、發達の勢ひは殆ど道理を漸々離れゆく程までに進みしを以て、扨は此長所を知らざる者をして道理外れの虚文字なりと迄誤認するに至らしめたるなり。例へば「毫を揮て落せば紙雲煙の如し」とか「焦遂五斗方に卓然」とか、「白髪三千丈」とか「叱咤百雷の聲」とか、之れ道理を以て論ぜば虚飾の文字に相違なし、去れども是等は何れも律音を宗とする所より來りしものにて、雲煙、五斗、三千丈、百雷などは其意味より見るも、音調より聽くも、さも多大長なる壯大の感を動かすものなり。去りとて多き程其感深かるべしとて五斗を五石又は六斗とし、三千丈を四千丈又は三億丈とせば、其音調悪くして却つて強き力衰へ、少小短との感を生ずるもの也。日本にても旗本八萬騎、江戸八百八町、無くて七癖有て四十八癖など言ふに同じ。此點こそ漢文が和文に勝りたる中の一にして、和文字が壯重の長點を遙か漢文字に讓るの所とす。旗本八百万、江戸八百八町など言はば如何、殆ど興の醒めたる話しなり。又猛虎の一聲山月寒し、叱咤一番萬軍寂たりの句など、僅かの短文字にして此犯す可からざるの凄絶勇大の思想を現はす所、をさ〳〵ユーゴーの一呵膽を刺すの筆も及ばざる趣味を有せり。漢文字は實に「勢ひ」なり、然るが故に微細能く序すといふ點に至りては、遙か英文字の下にあり、翠緑萬象倒まに浮ぶの如き句は、却つて多々細巧の形容文字に勝る事多しと雖ども、概して粗大なるの憾み多し、唯俳諧的の餘情餘韻にて其不足を補ひ來りしなり、又艶美、温軟、細美等の「美」に至りては和文字に劣るもの數等なるを見る、激烈、燦爛、昂情、壯重等に至りては、實に是れ此無比。學ぶ者此長所と短所を味ふ事大切なり。

○救世軍の母ブース夫人

「サルベーション、アーミー」の創立者、ブース氏が事業を半ば助け成し、其文學上の著作を全く代つて執筆したる、熱信、切愛、貞烈なる賢夫人、ブース女史は、昨年暮に死

去しぬ。其が一生の履歴は救世軍の小歴史となれり。

ブース夫人の性質、事業等に至つては世人多くは知らざるもの如し、されば此に記述するも無用の事に非る可し、思ふに世の新聞雜誌の記者未だ救世軍の何たるを知らず、從つてブース夫人を見る亦冷々たらん、されど試みに救世軍中の人に問へ、彼等が夫人を失ひし時に當つては皆父母の喪を悲むが如くありき、以て夫人に對する人望の如何を知る可し。

夫人は六十二年前ダービイシヤイアのアシユボルンに生れたり、晩年に至り、瘍を病む事二歳餘、客年臘月初旬クラクトン、アン、シーに於て溘然去つて他界に歸りぬ、夫人が救世軍の大將ゼ子ラル、ブース氏に嫁したるは、實に六年前の事なりき。

夫人が始めて教を奉じたるは千八百六十年の事なりき、信仰の心と共に傳道の精神頻りに起りしが、夫人は自ら傳道するの力なきを感じ、心中窃かに憂苦に堪へざりしが、遂に斷然志を決し、其良人ブース氏が司れる集會に於て始めて道の事を語れり、此より後道を傳へ、主の證を爲し、嘗て一日も怠らざりき、若主の道を傳ふる爲めに神に撰ばれし人ありとせ

七 ば、夫人の如きは即ち其内の一人なり、若主の爲めに盡して好結果を奏し、聖靈の恩化を誠に受けし者ありと云はゞ、夫人は即ち其内の一人なり。

ブース氏は始めメソヂストの一派に屬し、傳道に熱心なりしが或會議にてブース氏をして傳道事業を爲さしめざるに至れり、されば氏は直ちに職を辭し、四年の間萬里雲水の間に旅客となり、至る所に宗教上の會合を催したり、千八百六十四年ロンドンに行き、此に救世軍の旗を翻せり、人其擧を見て嘲罵して止まざりき、何ぞ知らん世人の賤しむる所、實に是天に於て貴重の事業なるを、此間夫人は常に事を良人と共になし、全力を傾けて正義の爲めに盡せり、或は辨舌を以て或は文筆に依て大ひに働けり、「進歩的基督教」「神性」「生と死」の諸書は夫人の手に成りしものなり、一度之を繙かば夫人が滿腑の熱と犧牲の發心は昭乎として紙面に溢るゝを見る、其演説の如き一度ひゞかば其聲永く天に於て反響せしならん。

夫人終生の鴻業中最も異様の觀を呈せしは上下兩等社會を調和せしの一事なり、夫人が至りし所は上は金光 玉色 燦然たる貴門より下は破屋僅かに雨露を凌ぐの貧家に及べり其上等

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

最も適するものにして、是れより發達して音調を成し文字と成り文章を成る、故に能辯家文を作ふものには音韻調和なるものは甚だ力あるを知るならん、然も學よ日本に於て[illegible]調子（文字の調子好き事を話し頭の[illegible]事なり）と言ふものの是れなり。支那語は同音甚だ多けれども[illegible]方に由りて能く之を區別するが如く、支那文字は[illegible]に於て甚だ發達をなしたり、發達の勢ひは殆ど[illegible]を漸く離れゆく程までに進みしを以て、故に其長所を知らざる者をして[illegible]外れの[illegible]文字なりと速斷するに至らしめたるなり。例へば「[illegible]を[illegible]て[illegible]煙の如し」とか「[illegible]五斗方に[illegible]然」とか、「白髮三千丈」とか「叱咤百雷の聲」とか、之れ道理を以て論ぜば皆[illegible]の文字に相違なし、去れども是等は[illegible]に律音を[illegible]にする[illegible]より出たりしものにて、[illegible]、五斗、三千丈、百雷などは其[illegible]より見るも、音調より聽くも、さも多大長なる壯大の[illegible]を[illegible]すものなり。去りとて多き程其感深かるべしとて五斗を五石又は六斗とし、三千丈を四千丈又は三億丈とせば、其音調悪しくして却つて強き力衰へ、少小細との感を生ずるもの也。日本にても[illegible]八萬騎、江戸八百八町、無くて七癖有て四十八癖なと言ふに[illegible]一[illegible]にして、和文字の[illegible]長短を[illegible]其[illegible]江戸八百八町なと言ふ[illegible]なり。又[illegible]の一[illegible]し、[illegible]一[illegible]句など、[illegible]の[illegible]文字にして[illegible]思想を[illegible]はす[illegible]、そこ〴〵ユーゴーの一[illegible]を[illegible]す[illegible]之に及ばざる[illegible]を有せり。[illegible]文字は實に[illegible]なるが故に[illegible]く序[illegible]といふ點に至りては、[illegible]の文字の下にあり、[illegible]に[illegible]ぶの如き句は、[illegible]つて多く[illegible]の[illegible]字に[illegible]多しと雖ども、[illegible]して[illegible]大なるの[illegible]多し、[illegible]の[illegible]にて其不足を[illegible]來りしなれ、又[illegible]」に至りては和文字に劣るもの[illegible]なるを見る、[illegible]、[illegible]、[illegible]等よ至りては、實よ是れ[illegible]を[illegible]ふ事大切なり。

○救世軍の母ブース夫人

「サルベーション、アーミー」の創立者、ブース氏が事業を半ば助け成し、其文學上の著作を全く代つて執筆したる、[illegible]、[illegible]、貞[illegible]なる賢夫人、ブース女史は、昨年[illegible]に死

去しぬ。其が一生の履歴は救世軍の小歴史となれり。

ブース夫人の性質、事業等に至つては世人多くは知らざるものゝ如し、されば此に記述するも無用の事に非る可し、思ふに世の新聞雜誌の記者未だ救世軍の何たるを知らず、從つてブース夫人を見る亦冷々たらん、されど試みに救世軍中の人に問へ、彼等が夫人を失ひし時に當つては皆父母の喪を悲むが如くありき、以て夫人に對する人望の如何を知る可し。

夫人は六十二年前ダービイシヤイアのアシユボルンに生れたり、晩年に至り、瘍を病む事二歳餘、客年臘月初旬クラクトン、アン、シーに於て溘然去つて他界に歸りぬ、夫人が救世軍の大將ゼ子ラル、ブース氏に嫁したるは、實に六年前の事ありき。

夫人が始めて教を奉じたるは千八百六十年の事なりき、信仰の心と共に傳道の精神頻りに起りしが、夫人は自ら傳道するの力なきを感じ、心中窃かに憂苦に堪へざりしが、遂に斷然志を決し、其良人ブース氏が司れる集會に於て始めて道の事を語れり、此より後道を傳へ、主の證を爲し、甞て一日も怠らざりき、若主の道を傳ふる爲めに神に撰ばれし人ありとせば、夫人の如きは即ち其内の一人なり、若主の爲めに盡して好結果を奏し、聖靈の恩化を誠に受けし者ありと云はゞ、夫人は即ち其内の一人なり。

ブース氏は始めメソヂストの一派に屬し、傳道に熱心なりしが或會議にてブース氏をして傳道事業を爲さしめざるに至れり、されば氏は直ちに職を辭し、四年の間萬里雲水の間に旅客となり、至る所に宗教上の會合を催したり、千八百六十四年ロンドンに行き、此に救世軍の旗を翻せり、人其擧を見て嘲罵して止まざりき、何ぞ知らん世人の賤しむる所、實に是天に於て貴重の事業なるを、此間夫人は常に事を良人と共になし、全力を傾けて正義の爲めに盡せり、或は辨舌を以て或は文筆に依て大ひに働けり、「進歩的基督教」「神性」「生と死」の諸書は夫人の手に成りしものなり、一度之を繙かば夫人が滿腑の熱と犧牲の苦心は昭乎として紙面に溢るゝを見る、其演説の如き一度ひゞかば其聲永く天に於て反響せしあらん。

夫人終生の鴻業中最も異様の觀を呈せしは上下兩等社會を調和せしの一事なり、夫人が至りし所は上は金光 玉色 燦然たる貴門より下は破屋僅かに雨露を凌ぐの貧家に及べり其上等

七

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

社會の人に接するや、富貴も之を犠牲となし、主の爲めに身を献げて貧民を救ふべきを説きたり、貧民に遇ふや、嫉妬の感を去り、好意を以て上等人民に對すべきを諭し、兩種の者に主基督は等しく友となり救主とならせ給ふを告げたり、美擧と云はざる可けんや。

かく衆人の爲めに盡せしと共に家庭の職務を全ふし、誠に良妻賢母の模範たるに恥ぢず、良人と小供の爲めに幸福なる家庭を作り、八子悉く基督教的の教化を受けたり、夫人は只に自家を幸ひならしめしに止らず、他に之に傚ふて善美の家庭を作せしもの幾許と云ふ事を知らず、夫人が家庭を整理するの理想、小児の教育法等一として見る者をして感ぜしめざるはなかりき、夫人の感化により、社會の下層に沈み、絶望の域に苦しみし者、高潔、眞信の内に立返りし婦人、思ふに數千人に下らざる可し。

階級の上下を問はず、身の貧富を論ぜず、英國内幾千万の人民が夫人に對して有せし尊愛は實に著るしきものにて云ひ盡すべきにあらず、古來斯の如く多數の人民をして尊敬と親愛を表せしめたる女子は一人もあらじと思ふ、夫人將に病床に死せんとせし時、其子等と知友に宛て、送れる文あり、曰く

我親愛なる小供等と友よ、妾深く御身等を愛し、神助によりて聊か御身等を助くるを得たり、妾今神に召され、御身等と別れざるを得ず、されど信仰の戰は長く止むる勿れ、御身等各己れを制し、主を愛し、世にありて無用の者となるなかれ、妾御身等の爲めに幸福を祈る、戰へよ、神御身等と共にあり、最後に全勝を占めん、妾亦御身等と天にて遇はん。

（キャザリーン、ブース）

嗚呼夫人の如きは戰へば必らず勝つの勇者なり、主の忠僕なり、神の聖き靈を受け、最も高潔貞操もて人を愛せし人なり、誠に暗世の燈臺たりき。

今や救世軍の勢威漸く社會に強し、甞て基督が人民一般に救ひの道を傳へしが如く、今日亦英國にて階級の如何を問はず道を宣ぶる一組織あり、即ち救世軍是なり、殿堂の壯宏なるものはあるなし、深堂廣間暗き所、無數の燈光を點ずるが如きはせず、儀式に流れ、死文を守る事は爲さず、されど抗す可らざる大勢力は今駸々乎として英國本地を侵略するを見る豈基督教内の一偉觀ならずや。

懺悔、異境の友に贈る

雲峯子

神恩優渥、天地に充溢す、人之を讃美せざる所以のもの、惡習に染み、迷雲に蔽はるればなり、一朝罪世を離れ、眼を明かにして見ば大ひに悟る所あらん、近頃大ひに感ぜし人あり、其心を借りて、左に述ぶ、盡し得ざるは筆の至らざるが爲めのみ、讀者の寬恕を祈る。

上

ひさかたの、あまつ光りにてらされつ、樂しき園に
住なして、神にあるてう吾友よ、いざや語らん聞き給かし。
こし方は、我まのわたりそびえつる、罪のやま〳〵
いと高く、迷ひの雲霧いとふかく、汝が住む方を
へだてけり、汝は樂しきそのにあり、我はやみぢに
さまよひぬ、暗きところは光りをば、惡むなるとぞ
さればわれ、汝をうとくも思ひけるかな。
かずおほき、百千の羊も思ひおき、迷ふ一つを
ひとすぢに、心にかくる大かみの、御手や我をば
誘ひけん、罪の山をばこえければ、迷ひの雲も
立わかれ、光りさやかに見えそめて、汝と近くも
なりにけるかな。

中

つみの内に、さまよひければ思はずも、汝がこゝろをば
いかばかり、なやましにけん我ために、こゝろつくして
朝な夕な、神のみまへにひれふして、なみだながらに
祈りきと、きゝにし日より我つみの、ふかきを知りて
我もまた、あまつみ神にこゝろより、悔ゆるとすれば
やゑばもて、胸を刺さるゝ心地こそすれ。
梅が香も、ちり殘りける梅園に、日かげのどかに
匂ふ頃、共にこゝろをうちひらき、語りし時ぞ
忍ばるゝ、人はねむりて、草木まで、更けしづまれば
窓ちかき、かけ樋の水の音高く、聞えし夜半に
もろともに、祈りし事も忘られぬかな。
ひかりをば、見るにつけても罪の世を、渡りし時ぞ
なげかれぬ、汝に別れて都路に、立出でけるが
道すがら、汝が住む空をかへり見て、思はず足を
ふみとゞめ、心ひそかに我神よ、罪をばゆるし

給へとて、いのりし事もしば〳〵なりき。

下

まごゝろに、祈らば罪を許すとも、ちかひ給へる
大神は、我身の負ひし重荷をば、御手をのばして
取り放ち、平安きこゝろを、あたへけり、されば我身の
行末は、こゝろのまゝに此世をば、渡るとはせじ
我神の、みちびくかたにまかせてまし。
今はや、あだなる愛は立のぼる、けふりの如く
消えはてぬ、たからもつひに朽ちはてん、此世の榮えも
願ふまじ、いとも聖けきこゝろにて、あまつみ神と
わがともを、愛くしまなんされぱとよ、思ひのまゝに
行なはじ、我こゝろをばくまもなく、汝は知るらし
我友よ、わが行末をあはれとも、思ひ見なゝん
我ために、樂しき世ともなりなんと、天つみ神に
いのれとぞ乞ふ。

島田三郎氏の音樂意見（其二）

凡そ美術の中に音樂程最も普通の性質を以て居るものはなからうと思ふ其普通と云ふ事は賢愚貧富貴賤老幼の差別なく一般に之に感ずる者である凡そ美術の中にて音樂は普通の性質の第一を占めて居る事は誰も疑はざる所でありますが彫刻とか繪畫とか云ふ者と音樂と較べて見れば最も普通の性質を以て居る者は音樂である之を人の長幼に就て論ずれば生れた許りの小兒が畫に感動するか彫刻に感動するか音樂に感動するかと云ふと第一に音樂に感ずる無論耳目と云ふ者は同し位の分量に發達する者でムります名工の畫いた畫を見て悦ぶ年齡が早いか喜ぶべき音樂を聞て躍りて樂しむ年齡が早いかと云ふに確に音樂に感ずる年齡が早い之より老年に至り一室にのみ閉籠つて居る時になつて何に一番感ずるかと云へば矢張之も音樂であると思ふ然らば人の一生に通して勢力を以て居る者は美術の中に就て音樂である次に賢愚の差別なく感ずる者は音樂である舜自ら五絃琴を造つて南風を歌ふたのも自ら感じた故に斯の如き事をしたのである孔子が齊に在りた時韶の樂を聞いて三ヶ月の間肉の味ひを知らなかつた事は論語の中に明記してありませう彼の大聖人が心を樂に入れて感動の深い事、實に驚くべき者であります彼の諺に音樂を奏づるに當て梁の上の塵が動き空を行く雲が停まると如何に形容の辭にせよ物を感ずる誠に最も深い者にあらざれば斯かる形容の言葉を用ゐるとは出來ない思想の乏しい人たりと雖も之を無情の者に比すれば實に有情動物であるならば感ぜらるゝに違いない然らば賢愚共に動す者は矢張音樂を以て第一に置て差支へないと思ふ夫より貧富に就て考へて見まするに音樂程社會に通じて普く用ゆべき性質を以て居る者はない音樂にも非常に名人もあれば普通の人もある音樂の械に自ら樂しみ又一家の樂しみを比べて見ましたならば音樂は貧富に通じて人の心を和らぐる者である例へば音樂の高い所を以て見ましたならば朝廷の宴會にも用ゐるでムりませう廟堂の祭祀にも奏するでムりませう軍隊には軍歌を歌うて軍人を慰め勇ましむる事にもなり一家團欒たる樂しみを取りて親も子も一つ所に居て共に歌ひ共に唱へると云ふ風習は上より下に及ぶ迄矢張成立つて居ります貧富に通じ上下に通ずる普通の性質を以て居る者は他の美術でなくして矢張音樂である斯の如き一般に行はるゝ器械が若し惡るかつたならば其時は實に驚く可き弊害を受くるであらうと思ふ或は男女の惡しき行ひを畫き出し或は風俗を惡く煽動する音樂であつたならば實に大害を來しませう今迄は古代の音樂と消極的の考を云うた是より學術上並に教育上に必要であると云ふ事と積極的にどう云ふ益を與へると云ふ事に就き少し愚見を述て見たいと思ひます。

全體人間と云ふ者の目的には種々ムりますけれども適當に身體を利用する事をせなければならぬ適當に心を養ふ事をせなければならぬ一張一弛は文武の道なり一度張り一度弛むは人間の身體又斯の如し常に我慢して世の中を渡らうと云ふ事で

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は善き考も出ませぬ支那の春秋の時代に鄭の子產と云ふ人があり鄭の國の宰相となりて鄭の國が大國の間にはさまつて居りましたが此人が賢臣で心勞した者であつたから隣國の大國に少しも侮ざられなかつた此人の云うた事に朝廷にて考へられぬとも野外に往て考へると大層いゝ考が出ると身躰に弛みがなければ名案大策を立る事は出來ない然らば快樂は人間を善くする者である此音樂は快樂の一事に於て社會必要的の者と云はなければならぬ必要的の者であつて此勢強い器械を人の心を正しくし身躰を成長せしむる事に向はせるは教育上必要なる事であらう夫れには如何にして善しいかと云ふに先つ樂みを取ると云ふ事にしたら誠によろしかろうと思はれます英吉利「チェ スタフイルド」なる人あり其子に「バイチリン」を習ふ事を禁じた左樣なる音樂師の眞似をするなと云ふた事の話しがムります此人は我國の昔の儒者が俗樂を逐出した事と同し樣ですが是れは英吉利の昔の事で今日に至ては英吉利の如き音樂に就て評判のよい國でも高貴の人が率先して此事に力を盡します現在力を盡します人は社會を改良するの目的を以て成丈窮民にて晝は十二時間も働らき樂しみを取る事少なき職人社會にはどうかして人間必要の樂しみを與へたいと云ふので當時の女王の婿に當る「アルベルト」と云ふ人は專ばら此事に意を盡したが此善人の記念の爲めに國人が音樂堂を建てました昔しは貴族「チェ スタフイルド」が其子に音樂を習ふことを禁じたのが今日は變じて至尊と位置を並べる所の人が奬勵するに至つたのは理論上實地上社會の勢を一變した證據であらうと思ふ斯の如く凡ての事から考へて見ますると賢愚貧富の差別なく普通の性質を持て居る音樂に向て適當なる進路を取らしむる事は政治上に必要なる考だらうと思ふ是より話を轉じて音樂の實事上如何なる影響を及ぼすかと云ふ關係を以て居るかと云ふ事を御話ししたいと思ひます。

昔し薩摩の勇將の新納武藏守と云ふ人が肥後の加藤勢の國疆を窺ふを防がんと肥後の加藤が來るならばと云ふ歌を薩摩の少年に歌はせて勇氣を振はした後に此意を飜譯したのが山陽の兵兒の歌と云ふのであります音樂及唱歌は人情に發して一方には人情の發動であるが又一方には音樂の爲に人情を惹起すと云ふ事もある薩摩の人が勇壯であつたから新納武藏守も出たのです又此歌も出來たのだが少年の氣力を惹起したのは此歌の結果でムります獨逸の「ライン」の境を守る兵隊の防禦歌は獨逸の少年並に之より獨逸に生れる者にどれ丈の感覺を與へるでムりませう佛蘭西人をして「ライン」河を超えしめぬと云ふ志氣を養ふ事が出來る佛蘭西に侮を受けまいと云ふ事に餘程助を與へた獨逸本國歌は獨逸は一部の「スワビヤ」でもない「プロシヤ」でもない「バヾリヤ」でもない「ストリア」等でもない獨逸は自由の一國の人種を以て居る國であるとて矢張獨逸の聯邦を合せて只今の帝國を形造つたのは何者であるかと云へば種々の元因あらんが矢張斯の如き歌が小兒の內から國人の頭の中にしみこんで此結果を致したる事は疑ふ可らざる事であるしかしながら獨逸の起りたるは種々の原因がありて出來た事だから「ライン」の歌並に祖國歌の結果も重く見ないで輕く見る事も出來ませう左れども佛蘭西の「マルセレーズ」の歌の如きは「ナポレオン」三世が帝國を形造て居つた時には嚴重に禁じたものであります一度佛蘭西の人民が此歌を歌へば此歌の爲に人心が動いて反逆の起るを恐れて禁じたに相違ない然らば前の國境を守る歌祖國歌は獨逸が佛蘭西の侮を受けない結果を致し佛蘭西の「マルセレーズ」の歌の事を考へて見たならば歌曲が人心に大いある影響を及ぼすと云ふ事は事實に於て明なるとであります又人心は何れの國も同じき事なれば之を只獨逸佛蘭西の事として見る可らず我日本に於ても正しき音樂が世の中に成立ちましたなら大に國を益するでムりませう今迄我國に音樂の必要を知らなかつた事は元來の偏癖から此の如き事をしたので之を支那西洋諸國の事實に考て見たならば必要的の一科である爰に幼穉なる人民に注意をすべき一の事があります維新戰亂の際に當ては美術抔の考はなくひたすら目前の事に狂奔して種々の奇談が有りましたが此に一の驚く可き話しは此上野の公園の澤山の樹木を伐て此地を茶畠にしていゝだらうと云ふ者が有た、すると或る外國人が何年過ぐればあの松が出來るかと云うた事がありました幸に松は伐られなく夫から段々年を經て居る內に今では保存的の精神が出て來ました若し其時に伐たならば不幸にして此公園が茶畠になつたかも知れぬ立派なる堂宮も一時の考から大分破つた事がありますするが今では美術の爲に保存すると云ふ事が宜あんばいになつて參りました今日の音樂も是れと同樣に無益の者だと思はれて打擲かる危さがある畵や彫刻や今日は漸く世に重ぜらるゝに何故に音樂は無用視せらるゝか是れは從來の偏僻なる教育の餘習と俗樂のみが行はれた結果である凡そ無形の者を見ると云ふのは餘程開けた人でなければならぬ今日音樂の必要を認むる者の少ないのも怪しむに足らず斯く今日迄我國の音樂は不幸の經歷で充されたが後來は如何なる有樣に成り行かうか私の見る所を以てすれば我日本は支那よりも音樂の成長は立派に行くであらうと思ふ此の疑問に付ては私は極研究に乏しいのでムりますが支那の古代の音樂は成長せずに年を經るに從て衰へた歐羅巴は段々成長して來る支那は古來屢々北の人種が侵入して北の音は話しをするに就ても叫ぶ樣な音が強くして誠に音樂に適せぬ人種である柔かな言葉を出す所の土地に音樂は發達が強くして朔北寒冽の土地には餘り音樂の成長はない支那は常に北方より侵畧せられ現に今代滿清の天子も矢張北方の人種である國內一般に北人の勢力に壓せられて居る左れば其音樂も我日本の如く揚々たる性質を受くる事はむづかしい然るに日本の國語は母音多くして流暢に活動する言語なれば人間社會に欠く可らざる快樂の一元素たる音樂が日本の國語に於て成長せぬ事は決してないたとへ是迄の經歷に於て他の美術に劣るも後來に大いなる望のある事なれば此事を擔任する諸君に御盡力を仰ぐ事が一點の希望でムります。

（完）

理學

○夜の空氣人を害する譯

吉川仲子

大抵の人は、夜の空氣は晝の空氣より健康によろしくないと考へます、熱帶地方に流行する恐ろしき熱病が、十中八九は、夜の間に人に感染すると云ふとは、此考を確める材料でござります。然し、地面にある腐敗せる物より生ずる有毒なる傳染病等、乃ち此熱病を引起す源因は、夜の清涼なる時よりも、晝の極熱き時に非常に澤山生ずるものでござりますが、晝間は熱帶のとてですから、斯る樣な土地に空氣が温て輕くなり、膨脹して上の方え昇ります。それゆへ、病毒はいくら出來ても、直に流動する空氣の爲め運び去られて稀薄になります、如斯晝間には、病毒は生じても、太陽熱の爲め直に散て仕舞ひますが、夜分は太陽の熱が空氣の運動を起しませぬゆへ、出來た毒は、皆大氣の下層に密に堆積します。譬如熱病の毒の樣な物は生ぜぬと致した所が、健康を害する物を生ずる植物質の物の腐敗は、大抵の土地には起るものです。そして、晝は、其有害物が直に分散しますが、夜は人が呼吸する位に土地に近く積ますから、夜分の空氣は健康を害するものとなります。

○寢室の位置

前顯、夜氣の人を害する源因から考ますれば、一つの家でも、其樓上と樓下とは、此害を受る事が同樣でないとが判ます。地面から高く聳て不健康な空氣が届ぬ所に在る部屋は、寢室に最も適當で、樓下は最も危險です、ドクトル、ラッシの書によれば、ヒラデルヒアにて、黄熱病の流行した時に、三階に部屋を持て居る人は、樓下に住居てある人よりも、此病に罹とが遙に少かつたと申ます。平屋では、人が地面から三四尺離て眠わけですから、實に不安心の至です。又低き部屋に眠ことは、田舍でするより、都府に於てする方が害が多いかと存じます。

○鷄卵の成分

卵の殼は主に炭酸石灰から出來て居ります。それには孵る時雛子に空氣を供給するため、極て小さな孔が澤山あります。そして其重さは、通常は卵全躰の重さの殆ど十分の一です。卵の白みは、百分の十五乃至二十の蛋白質を含む水です。黄みも亦蛋白と水とですが、外に硫黄と燐の化合物を含む所の油を多量に（乾きたる黄みの三分の二）含みます。普通の大さ

の鷄卵の重さは、殆ど五千「グレイン」、で其内殼が百「グレイン、」白みが六百「グレイン、」黄みが三百「グレイン」でござります。又其黄みと白みとの成分の百分比例は水七四・蛋白一四・脂肪一〇・五、灰(諸塩類)一・五、合計一〇〇です。

小說

浮雲胸

雲巖子

第五回　空榮華（上）

過る夏期より內閣の變動、某會社の紛雜、政界の混亂等により種々の問題起りければ世人多くは文學の事に注意を怠り、狂奔するあり、迷走するあり、あるは怒つて叫び、あるは冷やかに罵り、諷言を弄するあれば、激論を吐くあり、人心恰も涌くが如くなりしに、十一月末つ方より少しく狂熱も冷却し去り、諸般の問題亦論ずるものあきに至れり、されば十二月初旬に至りては諸新聞諸雜誌の記事項目更らに目新らしきものなし、此に於て機を見るに巧みなるものは忽ち筆鋒を、文學の事に向け、某山人の新作小說を掲ぐとて二號活字をもて諸新聞に廣告するあれば、某居士の文學論を附錄とすと報ずるあり、一小冊子世に出づればこは好材料こそ出來つれと筆を振ひ、文を長くして批評を爲し、一小說版に上れば世人恰も大旱に雨を得たるが如く喜びて止まず、人情の變轉眞に奇にして妙。

何れの新聞紙を見るも一二の小說を掲げ、「新刊書籍」「批評」等の題を設けて縷述する所、山鳥の尾の長々しく、心あるものは「批評家は飴屋の術をや學びけん、章句を延長する事の巧みさよ」と顏を皺ぬるはなかりけり。

皇城の東南に賑ふ町あり、此に太平新聞社と看板を掲げ、活版印刷の音さはがしきにて、商賈繁昌のさま知られけり、はや大時計の音十一時を打ちて程久し、社の樓上編輯局にて許多の新聞記者テーブルを擁して椅子に倚る、眼光を鋭くして横字雜誌を忙がはしく開き見るは明朝發兌すべき新紙の種探しにや、原稿紙に數行書きたるまゝ筆の柄の拉ぐる許り、握りつめ、頭を垂れて考ふる人あり、とは飴屋の延長術も盡きたるにや、其傍らなる椅子によりて、今しも身を背ろに傾け、双手をあげて口を開くはアクビを爲すなり、雜報少しく足らず何かなきやと呼ぶあり、「批評欄尚半段の餘白あり」と云ふ

あり、「小說も例日より短かし」と應ずるあり、衆口一齊に餘白の多くして記事の少なきを嘆ず。

郵便脚夫の過るを硝子戸ごしに見て、社員頭を延はし、我社に入れがしと打ながむ、望むが如く、脚夫入る、間もなく受付なる人、郵便物を編輯局に持來る、手紙の多くは取消要求の爲めなりとは昨日何をか記載しけん、一二の雜報に加ふべきもあり、内に一冊子あり、封皮に朱字にて「進呈」と「乞高評」とぞ書きつけたりける、批評掛りの人顏の皺をのばし、先づ封紙を破る、題して「日本の花」と云ふ、春山女史著とあり、序文は誰が書きしにや、讀みがたきもの多ければ批評家も困じはて「こは上手なるやはた下手にやと」傍に問ふ、傍人冷笑しつゝ「そは上手なる可し」と云ふ、批評家一枚を繰れば、自序と云ふあり、「こは活版なれば讀み易し、其一節に云ふ

妾が本篇を起草せる目的、只に章句を並ぶるが爲めにあらず、徒らに筆墨を弄するにあらず、嘗て某女學校に學びし時より少しく感ずる所あり、實に默するに忍びず、不文を顧みず、讀者の高閲を煩はさんとす、目的とは何ぞや、曰く女權伸張の事即ち是れなり。

云々と、太平新聞社の批評家も是を讀みて一驚を喫せるにや、冊を閉ぢて大笑す、傍人怪みて問ふ、批評家笑ひつゝ語れば一塲幾多の記者共に笑ふ、あるは「生意氣の女史なり」と云ひあるは「其志望けなげなり」と呼びて暫しは笑ひさゞめく聲止まざりけり。

批評家なる人亦冊子を開きて二頁ばかり讀むと見えしが、「未だ未熟のあと多けれど女子の手になりしと思へば可なり、斯る著作を爲す女子の出來しぞ珍らしき」と云ひつゝ亦讀む、批評家てうものは眼光紙背にも通ずるにや、一度に數頁も開き數行讀むかと見れば亦數頁開く、斯くて二十分計りにて百四十餘頁を讀み盡せるが如し、傍らなる人「早や讀み終りしや」と云へば「斯る書冊を精しく讀まん遑なし」と云ふ、亦「如何なる趣向なるか、面白きや」と問はるれば批評家は「さて趣向はよくも知らず、文章見る可き所なし、されど女子の著作なりと思へば先づ可なりと云はざる可らず」と答へ、筆を取りて書きはじむるは其批評文なる可し、「半段の餘白之にて充ちたり」と喜ばしげに語る。

今日は十二月十五日某新聞を見るに新刊書籍と題して書名數

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

行を記す、終りにあるは「日本の花」春山女史著とあり、傍らに「右諸書の批評は明日の紙上に掲ぐ可し」と記したり、何處の新聞にか「日本の花」の批評文ありやと探し求むるに未だ多くは掲げず、只太平新聞にのみ精評あり、文に曰く

「日本の花」は春山女史浮田波子氏の著作にして女權擴張を目的とする一篇の小說なり、主人公は一烈女にして學識あり、德義あり、勇氣あり、よく辛苦に堪へ、憂愁を拂つて一偉業を奏するの美談を主意とす、卑俗汚猥の文學行はるる今日に於て斯る清潔の文字を得たるは吾人喜びに堪へざる所なり（中畧）女史は幼きより小說を愛讀せしと自序中に明記せらるゝだけありて全文流暢にして優雅なり、西洋諸國に於て、女子にして文學に長ずるもの多し、然るに我國に於ては中古以來女子の敎育欠けたるが故に女文學者寥々晨天に星宿を眺むるが如くありき、近來女子敎育の隆盛と共に女文學者の出るは賀す可きの至りなり、先きには秋天女史の傑作あり、今また春山女史の此篇あり、日本文學の爲め賀すべき事と云ふ可し。

云々と、こは是昨日太平新聞社にて批評家の起草せる文字なり、批評の事容易なりと云ふ可し、彼の批評家の如く一部を窺ふて全判を評し去るを得ば。

浮田なみ子は去月或書店にて其著にかゝる小說を發兌せん事を依賴せり、數日以前版成りしとて數部を送り來りし故手紙を添へて、知友に分てり、發兌元より諸新聞社にも送りしと聞けば批評の出でんは今日か明日かと待ち受けたり、午前十時頃リンの音して新聞賣る子の聲聞ゆ、二三枚を購ひて見る、太平新聞第二面の批評欄を見るに不圖目につきしは「日本の花」と云へる文字なり、未だ批評文を讀まざるに胸騷き、心動きて恍然たり、やがて思ひを靜めて讀む、讀む間に顏色赤らみ、眼霑み辛ふじて讀み終り、暫し茫然たりしは意外の好評なりしが故ある可し、始めの著作にして斯る好評を得んとは思ふに夢想だもせざりし處あらん。

叔母の裁縫してありける室になみ子は走り行き、太平新聞を示しつ、いとほこりがほに「思はぬ好評を得て却りて愧ぢ入りぬ」と云ふ、叔母も批評文を見て「されば御身の小說の傑作なりしが故ならん、めでたき事の限りにこそ」と云へば波子は益々得々然たり、憐む可し空榮浮雲に似たるを知らず。

明くれば十六日、例によつて新聞屋來る、なみ子は十有余枚の新聞を買ひ取り、批評はなきやと目を配る、東野新報批評欄に十數行の評あり、可もなく不可もなく冷々淡々たる文字なり、なみ子は之を見て不滿の色をあらはしぬ。讀み去り、讀み來つて東都通信と云へる新聞に至る、亦二十行余りの評言あり、頗ぶる好評なり、亦なみ子は打よろこびて見ゆ、是より新聞雜誌の批評續々出づ、されど太平新聞の評と大同小異あるのみ。

なみ子は曾て某女學校よありける日、小說をものせんとて着筆せしが草し終らずして卒業とはなりぬ、卒業して後先きに起草せしものを見れば意に充たざる所多しとて更らに起草したり、如何で小說を公にして好評を博し、天晴れ文學者と世に稱賛せられんと企圖する事久しかりき、九月以來修む可き學課をも怠り、日夜心をこめて草し終りしは彼の小說「日本の花」なり、發兌してより以來世評如何と憂慮して安眠せざるも二夜に及べりしとぞ、好評出るに及ひ、心中快樂に充ち日々うき立ちてのみ居たりけり。

批評家の一批一評は人の進退に關する事多し、されば一冊子の小と雖も、一短篇の文字と雖も輕々しく評し去るは不可なり、況んや人の評言に雷同して諛言を是事とするものに於てをや、日本文學初步の時代に當り、女子文學者の輩出する、可は即ち可なれども不當の評を爲して人を誤るに於ては何とか云はん、嗚呼何とか云はん。

隨感

國の基礎とも云ひつ可き女教師なれば世の人の重しとなさゞるは口惜しくかゝる人もあれかしと思ひ實墨磯貝詞兄のもとによみておくる

戶川殘花

小學女教師

（一）卯月の空は晴れわたり
若葉涼しくしげりあふ
野中の岡に白〳〵と
さゝやかなれど稚子が
學びの家はいと淸し

（二）君が望みはこの世にて
如何あることゝ問ぬれば
學びの道に稚子の
一ト日〳〵とすゝむをば
とよなき譽とこたふなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（三）君がこゝろは白雲の
浮世の塵のあともなく
仰げばいよ〳〵彌高し
峯の端いづるさまにして
天津御空になびくごと

（四）あやまちなしゝ男の童
いましむ聲も靜にて
愛のまなじり麗はしや
をこたり眠る女の童
或は慰め或は譽め

（五）深き智識も慕はしく
身は稚子の其のために
いまはた鄙のわび住居
高き學藝も求むれど
なべての物を犠牲として

（六）事のあやめも差別なき
君がなさけの身にしみて
よその見る眼もあな樂し
犬打つ童牛追ふ子
まことの母か其子かと

（七）谷間のさくら峯の松
國に盡しゝ武士も
君が園生の二タ葉なり
匂ふ色香はしなあれど
世に勳功ある弱女も

（八）にごるこの世の淺澤に
君がこゝろの一ト筋に
黄金か妙にいと清し
泥土にも染ぬ細流
流るゝさまは白銀か

家政

「ホーム」議案

「シヤトウクワン」雜誌は、ホームの家政方に付き、四方の名高き婦人が意見を問ひけり、左に其答の重なるものを抄譯して掲げんとす。

（一）ワード、ハウ女史が意見

通常の青年女子と等しく妾も婚期に於て嫁ぎけるが家庭の細務に至りては知らざる事のみ多かりき、こは妾が勉學の時を得ざりしが故にあらで若かりし時全心を文學の事に注ぎたればなり、されば家庭を整理するの時期と成り、不都合を感ぜし事多く、甞て學びし處も其用を見ざるかと思へり、蓋し本職を全ふするの伎倆なくんば他の學問も用ゆる能はず。

前なる人の躓くは後者の戒めとこそ聞け、人が過ちし所を見て自ら鑑みるぞ望ましき。こは多く結婚して家庭の事に當る時心づくものなるが預じめ知るは最も願はしき所なり、如何なる家庭と雖も誠實巧手を以て事を治むる賢婦良妻なくんば眞の幸福と快樂を得べからず、されば才藝に富み、虚飾を事らとする婦女子より丁寧周到に家庭を治むる人を勝れりと云ふ可し。故に世の青年女子が心して家政を學ばん事を切に望

む、若自ら知らずんば如何にして之を婢僕に命ずるを得んや、人に爲さしめんとせば先づ自ら其事を知るを要す。

我國(米國を云ふ)に於ては女子多くは家庭の務めを疎んじ、之を奴婢に委るの弊あり、主婦の知らざる所を以て奴婢に爲さしむるは兩者互ひに快からず、之に反し主婦にして諸般の事を明知せばよく奴婢の勞力を察し亦自ら手を下して爲すを得べし、是主婦の品位を害するにあらず、眞誠の幸福を得る道なり、家庭の政務を全ふせば啻に幸ひなるのみならず、正人君子は之を以て益女子を敬せんに世上幾多の女子此に心を用ひざるは悲しむべきの限りなり、要するに善良の婢僕を得んとせば先づ主婦自ら善良ならざる可からず、是家庭を整理するの秘訣なり。

家政教育に欠くるの失二あり、婢僕に向つて命ずる事を知らざる一なり、其勞力の如何を察せざる二なり、近來禁酒の美風漸く盛となり、奴婢の詐僞を爲す者減ぜし故家庭を治むるの難易昔日と同じからず、されど倘主人の爲め、主人の財産の爲めに計る心は少し、故に家庭は一社會の如く永く主婦の注意を要するものなり、奴婢の心をして信實ならしめば、主に忠直に事へしめんには之を使用し、仕事を命ずる者が、絶へず適當の注意を爲すにあり、奴婢の橫着專恣なるは、主婦の怠惰不行届なるが故のみ。

家庭の美醜は主婦平常の心がけによるもの多し、されば憐愛の心をもて奴婢に對し、其過失あるにあたりても賓客の心もて恕する事大切なり、且亦家政は多く主婦の手づから爲すべきものなれば、奴婢は只己が助力者と見るべし、若主婦にして力足らず、事務繁忙なる時は奴婢をして代らしむるも不可なしと雖も、常に助力者、相談相手として丁重に奴婢を使用する事肝要なり。

良人「ちよいとあなた、何かお膳をこしらへて下さい、愛で…君さ、御一處に食べるから。

細君「デモあなた、今日はシケで、肴屋が參り升んし、夫れに、女中は使に行つて升から、アシヤ/\、何に致し升う、少しお待ちなすつて下さい、すれば肉でも買せて參り升からアシヤ/\。

極く心易き間柄なれば、兎に角、かゝる際には、大概の客は、實にどうもお氣の毒さま、そんなに御煩勞ならば、内へ歸つて喰へ升うにさ、口にこそいはね、心に思ふとなるべし。一家の主婦たるものは、能く/\其邊に注意せでは、知らず/\良人の交友を、傷くるとあるべし。光秀の妻のやうに、強ち髮をそひで、賓客を歡待す程にはなさずとも、眞心を込めて、丁寧に調理し、氣兼なくお客に食べさすやうにするが、專要なり。小言きゝながら拵へたる珍味よりは、快く進められたる一皿の浸しもの、なんぼうか味ひ美かるべけれ。

笑草

誰が田

ふみ子

火を以て火を救ひ、水を以て水を防ぐだに、其効なくして害多きものを、況してや救ふてふ目的にもあらず、防ぐてふ意思にもあらで、火を以て火に向ひ、水を以て水に抗せんには、其四邊の迷惑如何計りぞや。國用節すべし民力休養せざるべからずとは、目下我國の志士達が、銘々口にせらるゝ所なれど、左りとて此人々をして、第二の内閣を造らしめなば如何あるべき。果して能く政費を大節減せらるべきか、將又人民の心を慰めらるべきにや、僞は曾て彼志士といへる人々が、政黨の運動費として得たる金を、己が奢に費したるを知る、又地位の爲め權勢の爲めには、多年の知友も相分裂して、大合同を爲し得ざるを知る、されば第二の内閣を組織したりとて爭でか、俄に私欲を去り、私利を捨て、單に國と民との事のみを慮らるべき、冗費節減も覺束なきものなり、民力休養も常にはならず、甲に虐げらるゝ代り、乙の前をふるならば、人民にとりては有難くも何ともなき仕合せなりし、左ればこそ志士と唱ふる人々が、眉を逆立て、口を尖らし、我こそ國の爲に死す、我こそ民の爲に身を犧牲になしつと誇るも、商人は算盤を取りて差引勘定なしといひ、百姓は鍬を擔げて、私しヤアハア、國會が出來ても、肥しにやアなり申さぬと、小言く。是等の言俗むべきに似たれども、彼取て代るべし的の政治家、利己主義の志士に對しては實に相應はしき返辭ならめ。嗚呼勝も負るも、水と水、火と火、何れ吾人が迷惑ならぬはなければ、吾人は別に覺悟をば、定めねばならぬなり。

何れの頃にや、去る所に演説會を開きたるものあり、泣て有情の人に訴ふてふ題にて、辨士の名は國野爲二といふ。新聞の廣告げう〳〵敷、數日前より評判いと高かりければ、未だ聞き知らぬ名なれ共、傍聽無料とあれば損はあらじ。いざ試に往て見ん、如何なる事をかいふならむと、冷かし半分うち集ひたる人多かりければ、開會の當日は、城内立錐の地なきまでに、聽衆は充〳〵ぬ。やがて定めの時刻となれば、彼國野爲二といへる男は、しづ〳〵と演壇に上りて一揖し、諸君よ、諸君！と一聲叫びぬ。其調子の如何にも、温和しやかにて、嚴粛なる、名こそ聞へね、天晴一の、志士なりと思はれければ聽

衆は皆手を拍ちて喝采し、彼如何なる事を訴ふるにやと片唾を呑で扣たり。國野爲二は、徐々と我國維新后の政躰より説き初め、明治七八年以后、今日に至る迄、我國の志士仁人が、如何に苦慮し、如何に盡力しつる乎。今日立憲政躰の實行を見るに至りしも、皆我志士仁人が、風に櫛り雨に沐し、妻子を捨て、珍寳を擲ち、西に東に、奔走したる結果なれば、人民は之れに向つて、充分の謝意を表せざるべからず、而して又我國現時の狀况たる、立憲政躰の基礎は立ちたりといへ、未だ志士仁人が、枕を高ふして睡るべき時に非ず。愈益く奮勵して、國本の鞏固を謀らざるべからざる時なるに、多くの人民は政治に冷淡にして、毫も志士仁人を扶けず、甚だ同情同感に乏しきを以て、先進の士は、氣竭き力衰へて漸次に仆れ去らんとす、若し此儘にて過ぎ行かば、夫れ我此日本國を奈如せん。今や現に或る有名なる志士にして、運動費に窮し、天晴れ爲すあるの才を抱きて、空敷泥土に朽ちんとするものあり、拙者は態と其名は指さゝれども、此人は實に日本に功勞あるの人なり、在野の政治家として特に力を効したるの人なり、此人にして驥足を伸す能はずんば、夫れ此神洲を奈如せん。諸君にして若し果して我國の前途を慮り、目下の狀况を憂ふる所ろあらば、願くは此人を扶けよ、此人の爲に些少でも運動費を出されよ。拙者は決して其人より依賴を受けたるものに非ず、されど國家の爲め坐視するに忍びず、故に敢て微衷を吐漏し、以て諸君の賛助を促す。其名の如きは、諸君が義捐せられたる后、窃に之れを告ぐべし、其は其人の名譽を傷けんを恐るればなりと。說き去り說き來りたる辨舌、實に人の感を動かすに堪たり。是に於て聽衆中の半數は、太く胸を打たれ、或は五錢、三錢、十錢と、銘々思ひ〳〵に義捐をなさんとて、辨士室に至る、兼て備へ置ける箱に投じ、扨其救ひを受くべき名士の名はと問ひつるに、彼國野爲二といへる辨士は、咳一咳して答ふるやう。

「其名士は即ち斯くいふ拙者なり、自家の、訴へ、何と確かなものでは御坐らぬか

と答へたりとぞ。

今の志士、壯士と名くる人の内、かゝる類ひのとをなす人、實際ありやなしや。風に問ふに答へず、水に訴ふるに音あうして流れ行く。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

批評

幾多の韻文論（上）

雲峯子

日本文學史に一新面を開くの時期近けり、即ち韻文の隆盛さ之に關する議論の興起甚なり、日本評論に於て、國民の友に於て其他諸新聞諸雜誌に於て、見る所を以て知らる、苟も日本文學に志あるもの多少韻文に關するの意見あらん、されど余は一々之を評せんさするものにあらず、幾多の議論中余の聞き知れる所を大別して一言を附せん。

格調　是を云ふもの二種あり、一は日本從來の格調即ち七五若くは五七を用ゆ可しと云ひ、他は新調を創むべしと道ふ、山田美妙氏改進新聞に於て「玉藻」と「知盛卿」を批評せらるゝに當り、五七は謹嚴なり、七五は優美なり、五七は作り難く七五は調べ易し、されど概ずるに五七の調を用ゆるの勝れるに如かず（大意を略記するのみ）と云はれたり、熟々古來の長歌なるものを見るに五七の調を用ひしもの甚だ少し、其排列の如きは五七にあすも、七五なるも問ふの要なし、之を讀むに當つて自然に五七の順序に句讀を附し得るにあらずんば五七の格調と云ふ可からず、余の見る所を以てすれば人の五七なりと云ふもの其實七五の順序に非ずんば讀み難し、間々眞の五七なるものなきにはあらねど極めて少なきを見れば只に作り難きの故のみにあらず、實際國語に適せざるものあらん全く適せずと云ふにあらで、七五に比して適する事少なきなり、されば從來の格調に則れば自ら七五とあるは自然の勢ひなるべし豈に七五と五七とを區別して深く論ずるを須ひんや歸する所は一なるのみ。

例を遠きに求めざるも此事明かなり、思ふに美妙氏は夙に五七の七五に勝れるを信じ、常に之を用ひんとせられしならん、氏が醇沈香を見て余は之を知る、はじめに「名もえにし、ありしが、胡蝶、一年もゆめとありけり」とある二行を見ても正しく五七の心にて作られしならん、されど試に之を虚心平氣に讀み去れ、始めの五と次の七とは自ら關なく（句調にて）寧ろ第一行の七と第二行の五を一句として讀むの自然あるに如かず、即ち「ありしが胡蝶、一年も」と讀み、また第二行に於ても「一年も、夢とありけり」と云ひて切らんより「夢とありけりわらはれて」と云ふを適當なりと思ふ、近來氏の作らるゝ所の如き純然七五の格調のみ、日本評論第二十二號に寄られし韻文の始を見るに「其まゝの、語らぬ花に、涙かな」と、其初五は自らかけはなれ（句調に於て）第二句の七と次の五と相接するを見る、之を一行づゝ見ば氏が彼の作は全く誹諧を列記せるに異ならず、其意に於て聯絡あるが故に韻文なりと見ゆるのみ、韻文として見れば亦七五の法則に束縛せらるゝ事明かなり、氏が如何なる説明を爲すとも。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

文學

池袋清風大人批（東京案山子の屋社中）

鷹狩及網代

尾崎

かきくらし（うら）雪降る空は（のみたるゝ）白鷺を（に）しらふの鷹の追ひまはす見ゆ（なあはせつる哉）

市村

夕嵐木梢にさけぶとりの音もいとゞ身にしむ御狩野の原（あらしふく空にみたるゝあしたつの羽音身にしむ）

安藤

波の上に（風さゆる宇治の）さえておもしろのかゞり火の影うすらぎて見ゆる（川波にふくる）夜半哉

日高

月清き（衣手の谷）田上川に風さえておもしろの床にひをのよる見ゆ（かゞり更わたりつゝ）

歳暮及除夜

尾崎

とことはに今宵（日）の心持つからは（のかはらず）老てくやしき事もなからん

山口

行年のをしくもあれど（き心に）鶯の初音はかりは（はまたき）待れけるかな

寞

竹内

ひえの山やねのみのこる古寺の軒端の経にみそれ降るなり（秋風ぞふく）

評添削にて古寺秋風とすべし

寄書

色情愛情辨

Y、T、

男女相思ふ時は心の中双方一種特別の情を呈するとは心理學上疑ふ可らざる事實なり。俗に之を男女の情愛と云ふ。この心情に二樣あり。英語に一を「ラップ」と云ひ一を「ラスト」と云ふ。「ラップ」は高尙なる感情にして「ラスト」は劣等の情慾なり。邦語には確然たる區別なし。余は一を愛情と云ひ一を色情と名づけ聊か其異同を辨せんとす。その前に言語用法に就き一言せざる可らず。俗語に「色」「戀」など云ふ言あり。古昔は今日の如く卑しき意義なかりしとて、當時は「色このめ」或は「戀せよ」などゝ勸むる好事家もありと聞きぬ。古代の意味はさて置き、今日は決して斯る好奇の用法をなし、人をして下卑たる聯想を起さしめざる樣すると先進者の務なるべし。且つ「通用」より「特用」、「抽象」より「固定」と順序を經て變化するは言語進化の法則あり。今日は「色」と云ひ「戀」と云ひ、或は「色戀」と云ふ熟語の如きは（少なく

も俗語には)已に一定の意義あり。余は飽く迄是等の語と「愛情」と云ふ聖語を混同せざらんことを望む。術語は兎も角、言語は一般の用法に依るべし。國々言語の用法同じからず、試に「男女交際」なる語を英語に直譯せば如何ん。下卑たる例なれども「雪隱」(ゆきがくし)「小用」(小さき用事)、これらをその舊字義通りに用ゆるものあるか。余は日本將來の言語には「色情」と「愛情」との間には犯す可らざる意義の區別あらんことを望むなり。

かく用語を一定せる上にて注意すべきは、愛情は獨り男女兩性に限るものにあらざることなり。之を大にしては上帝が人類を化育庇護し給ふも愛情なり、下界のことを云へば先づ君臣主從の愛情より、親子の愛情をはじめ、父子の愛情あり、兄弟の愛情あり、朋友の愛情あり、夫婦の愛情あり、其名異なりと雖ども其品同じ。此中男女の愛情を以て尤も切なるものとなす。さればこそ愛情と云へば通例男女の間に成立つものと思ふ。さて此愛情とは人々日常に云ふ所なれども改まりて定義を下さんは容易のことに非ず、又其用もあらじ。余はその色情と異なる點を辨じて滿足せん。

色情と愛情と差別の點は數々あるべし、しかれども其根本の區別を云はゞ色情は一種の動物本能(Animal Instinct)にして人間があらゆる動物と普通に有する所なり。之に反し愛情は神を除き人間の特有する所にして、人間の万物に靈長たる特色の一なり。色情の一點より論ずれば人間と諸動物と異なる所なし。人類の重んずべきはたゞ愛情ありて之を利導し若くは全たく色情を働かしめざるを以つてなり。かの餓ゑては食を欲し、渴しては飲を欲し、苦を去り樂に就くの性に於て人間と動物と何の異なる所ある。たゞ其れ人には道義の性あり、故に餓死するも周の粟を食はず、渴しても盜泉を酌まず、生命を魚肉の如く輕んじ仁義を熊掌の如く重んずるなれ。男女情愛に至りても全たく相同じ。男女成熟の期に至れば多少この動物本能の發生なしと云は事實に反する論あり、何となれば是れ身體の發育と共なるべき者なればなり。此理を取りて彼の近眼なる論者は存娼論の鐵壁とせり。愛情は無邪氣なり、對性の長所に着眼するなり、その人の短所を恕すなり、その人の德性を慕ふなり、其人の益を謀るなり、其人の心と一致するなり、此身を其人に捧ぐるなり。此作用は動物本能に非ず、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

是非を分別し、利害を判斷し、曲直を商量する力ありて始めて能くし得べきとなり。愛情は年と共に移らず、形を見ず、苦樂節を改めず、これらに就ては愛情は全たく盲目なり。之に反し色情は期節と盛衰す、顏色容貌を重んずると雌雄淘汰の天則に依り動物界に於て毛色音聲形狀を重んずる如し。愛情は理性存在者の特有物、色情は動物普通の本能、饑渴の慾己に咎む可らずとせば、色情も亦豈に全然絕滅す可んや。たゞ饑渴のために飮食を求めばパンの爲に生くる凡庸人を生ぜん、色情を男女相戀の根基とする者あらば神聖なる人間を下して犬羊と伍せしめんとするの徒輩なり。

お三權助と事あり出奔すと「みやこ新聞」は傳ふ、學德兩絕の一秀才、某校に聞え高き一淑女と婚約成れりと「女學雜誌」は吹聽す。何故に一は卑しむべく、一は尊むべきか。媒人なき自由結婚なるが爲めに賤しむべきか。余惟ふに正式に依ると雖ども其原因動物本能の滿完を目的とせば其賤しむべきは一なり。男女は宜しく愛情に依りて相合ふべし、色情の汚濁に染む可らず。

余の論題は審微の問題にして之を辨ずるもの尠し、愛情を云ふものは人間には色情なきが如く唱へ、色情を云ふものは人を下等の動物と同ふせんとす。色情は何人も本能として固有せり。然れども之に所を與ふると與へざるは人の自由に在り。色情は眞正の愛情を知る者の心中には其領地なし。

余や無妻の一書生、男女の愛情につき極言するほどの實驗なしと雖ども、又た「ラップ」の何物たるを知らざるに非ず。竊に愛情が色情と全然獨立するとを確信す。見よカブールは戀人と婚するを得ざりしに非ずや、アンゼロはその愛人と一回のキッスさえせざりしに非ずや。又た終生婚せざりし一文人の死後愛人の遺髮を懷にせし事實もあり。誰れか此三人の愛情の濃かなりしを疑はんや。又た曾つてミルトンの「失樂園」にアダム、エバの交情を敍するを讀む。敍事切微に入る、しかも一語の色情に及ぶなし。われ茲に色情は各人固有の本能なりと云ふも何の恠しむべき所がある。人に尊ぶ所はその自由撰擇の能力と自制の力に在り。色情は本能なれば絕滅す可らずと云ふも、理性ある人間が之を制抑し利導し眞實の愛情をしてその支配を垂れしめ能はざらんや。余は「男女の道は思按の外」なりと云ふ俗諺がかく普く認めらるゝを慨するな

り。余は之を純然思按の中ありと思へり。人の世に存するはパンの爲にあらず、人の分を盡さん爲なり、男女の相思ふや、決してその本能たる色情の爲にあらず、高尙ある愛情を滿足せしめんためなり。しかるに滔々たる天下の凡庸人劣欲に支配せらるゝ東西みな然り。是に於て娼樓は巍然として聳ゆるなり、是に於て文明の廣街數万の賣女あるあり、是に於て天下に離婚多く、不幸の小兒多く、可憐の妻女多し。豈慨に堪ゆべけんや。此文を結ぶに當り余は沙翁の一節を引用せん。

Love comforteth, like sunshine often vain.
But lust's effect is tempest often sun:
Love's gentle spring doth always fresh remain;
Lust's winter cometh ere summer half be done:
Love surfeits not; lust like a glutton dies:
Love is all truth; lust is full of forged lies.

Ven. & Adon st. 134.

（客歳夏此稿文を草す思ふ所あり公にせざりしが今之を筐底に得たり依りて之を貴社に投す）

勅文禮拜論　前々號
宮中女官論　前號

時事

○三條公薨ず

誠忠謹直の人、永く逝く。今后陛下の聖側に侍べらんものを思ひ、內閣風荒れ我慢蟠かまらん時を想ひ、吾人太甚はだしく痛み、悲しむ。

○廢娼建議

帝國議會の豫算會議終結の日を、頸を延して待ちに待ちたる府下の公娼全廢論者は、三手に分れ、第一は、公娼全廢の請願書を提さげ、大井憲太郎氏以下六百六十八名の連署を以て出院し、第二は、同樣の主旨を以て、飯島魁氏の外以下五百二十五名の連署を以て、第三は、醜業者撰擧權剝奪の請願と題し、陸實氏以下十數名の連署を以て出院したり。而して、第一は、島田三郎氏の紹介を以て、巖本之を提出し、第二は、湯淺次郎氏の紹介を以て、淸水豊子之を提出し、第三は、植木枝盛の紹介を以て、飯野吉三郎氏之を提出したり。

○醫學士の廢娼演説

醫學士渡邊泰氏を會主とし、其の他數名の醫學士が發起によ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り、中濱東一郎、高田耕安、其他二三醫學士の公娼全廢演說あらんとす。

○女子高等師範學校

火事に助かりたる如く、辛くも燒殘りたり。吾人は毎度論辨せし如く、官立學校に賛成せざるものあれど、既に官立學校を設け置くとすれば、唯一の官立女學校をのみ廢するは、頗ぶる宜しきを得ざることとす。故に吾人も亦た此の度の議決を祝し置くべし。但し尙ほ再應の議を提出せんとする者あり、即はち、島田三郎、高田早苗、末松謙澄、其他の諸氏は、之を明治二十五年度より廢滅せしむることに內約議定したり。

○婦人國を維持す

亞米利加の婦人が「吾國は婦人の力にて維持す」と自信する覺悟は、莫大のものなり、此自信の念强きを以て、能く忍び能く潔ぎよきことを得、吾國の姉妹が業を執り、家を修むるの覺悟も亦斯くあらなん。去頃、府下にて全國蠶種業總代が大懇親會を開きたる折、福井縣の總代日下部氏が讀めりし歌に、

たをやめが、細き手業にとる絲は、
國の命をつなぎとめけり。

○鉄砲傳來

此頃ろ新聞帋に見ゆる鐵砲傳來の歷史を見よ。日本の女を賣つて外人が鐵砲を買入れたり、人を殺して、殺す道具を買入れたるなり。

○英國女皇新年の年玉

ビクトリア陛下が、英都の貧民に年玉として下し賜はりし品々は、牛肉と石炭となり、ウインソル城傀馬塲に集まりたる貧民に之を分ち、一軒に付、肉三斤乃至七斤、炭一乃至三ハンドレッドウエトヴ、給はれり。

○今后の議會

果して何如ん、成敗利鈍は關する所ろに非ず、議員たるもの宜しく正々堂々たるべし、道に於て鄕關人士に面目を失することある勿れ。

○今より何をか爲す

此期に到る、公等何事を爲さんとす、五十餘日の審議を六七日にて變更するの暇まあらんや、公等が再考するは固より可なり、再考の末何すれど別案を得べけんや、但だ當に前意見を執つて固く辨ずる所ろあるべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

問答

ふみ子

問　東京の女學校へ、女の子を入れて勉强させるには、月に幾何程の入費が、かゝり升か。

答　さやう、大概の學校の月謝は、一圓より一圓五十錢位迄で、食費は、二圓八十錢位より、三圓迄です、夫れに小使は、五十錢で濟す人もあれば、一圓餘も遣ふ人があり升、夫れは定まりはありませぬが、先づ一圓位を充てゝ置けば、一寸した書物位は買ふ餘裕がありましやう、次手に申て置升が、女の子は兎角着物を欲しがつて仕方がありませんが、夫れは子供の乞ふがまに〳〵なさらぬ方が宜しい、都會の風は、兎角華美に流れて居り升から。

問　下女が朝寐を致して、幾度起しても、起きぬのは、どうすれば宜しいでしやう。

答　朝寐をするとばかりでは分りませぬが、前夜別段に、夜を更したといふ事もなきに、毎朝朝寐をするのは、習慣となつて居るので有り升うから、能く朝起の効能をいひ聞かして、寐しなに明朝起き出づべき時間を、約束してお寐させなさるが宜しい。但一家の主婦が寐て居て、下女のみを起そうといふは無理ですから、主婦たるものは、是非下女と同時(若し朝寐の癖ある下女ならば)、下女より前に起出るゝが肝要です。主婦たる人が、毎朝々々下女より前に起き、こそ〳〵と臺所を働かるゝならば、いくら氣楽なる下女にても、必ず注意して、早起き致すやうになるべし。兎に角下女を朝起させるには、主婦が先づ起出づるこそ、第一の秘訣にて候。

問　女子に關するとを、主もに書きたる雜誌にて、貴社の女學雜誌の外に、見るべきものゝ名をお示し下さい。

答　目外も本誌の時事欄内で申し升た通り、只今は誠に、女學に關する雜誌が少なくなり升た。弊社から出る「女學生」か貴女の友か、いらつめか、此頃出た婦女雜誌といふのがある位でしやう。婦人矯風會で發兌して居る、矯風雜誌といふのがあり升が、是は別に會員に頒布するもので、賣品ではありません。其外には婦人衛生雜誌といふもあり、婦人教育會雜誌といふもあり升が、是等も、御覧なすつて宜しいでしやう。

通信

ふみ子編

○大阪通信

○去る十一日川口ドクトル、ラニン氏宅に於て約翰婦人會の親睦會あり會するもの百有餘名木間重庭大嶽惟明兩氏の有益なる演説ありたり因に記す仝婦人會は共同事業として貧兒教育院を設け既に八九名の貧兒を養育し居れり。

○大阪婦人教育會幹事は小林初子、荒木富子、稚米子の三氏當撰又仝會は愈々本月廿一日午后二時土佐堀青年會館に於て發會式を執行するよし。

○岩手縣盛岡通信

(風發子報)

○竹細工教授所　昨年貧民救助問題の盛んなりし頃貧民の子女にして無職業なるものに業を授くるため有志者の義捐金より成り立てられたるものにて盛岡市役所に於て是を監督し目下生徒大概二十名計程に教師一名取締一名あり近頃智徳上の教育もなす由にて市長より岩手教育協會に囑托せし趣なるが未だ其承諾なしと云ふ。

○市内の女教員　盛岡高等小學校に訓導一名(太田ふき女)盛岡第二尋常小學校に授業生一名(鈴木某女)あり外に市内各小學校の裁縫唱歌等の教授に雇はれ居る女教員六七名あり。

○江州通信

○近江婦人慈善會　の會員たる大津衛戍の將校等の夫人は先きに會員中華美を競はせて出席せしため一時は大に衰状を呈せしが大に悟る所ありて近頃は會員互に質素を專一とするに至り有夫人令孃方も二子織位の衣服を着して出席せらるゝにぞ昨今の集會は大に挽回せしよし是も今の會頭岩崎夫人の盡力多きに居るとぞ。

○學校の約束　此頃大津私立女學校の生徒中にキリスト教を聞くもの二三出來過日も打連て基督教會に至り説教を聴聞し翌日登校せしに幹事は其人々を呼び昨夜の不心得を戒め女子の身として殊に青年にありながら宗教に耳を傾くは未だ早し加之當校は宗教に關係なき定めなれば以後宗教を研究することを禁じ只學問にのみ勉勵すべしと忠告せり之が爲め彼女生等はキリスト教を聞くを得ざるに至れりと聞く信教自由の今日に於て如何にも壓制のことならずや。

○尙同校は如何なる都合にや京都本願寺の補助を得て其干渉を受けんとの相談ありと左れば早晩宗教との關係を生ぜんに……。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

宮廷録事

○御七夜　有栖川威仁親王殿下の妃、慰子殿下には去る十四日御分娩、女王降誕ありしが、去る二十日は初七夜に當らせたまふを以て、全親王殿下も横須賀より御歸京あり、皇后陛下よりも、數々の御贈物ありにりとぞ。

○御歌會　一月十九日宮中にて御施行あらせらるべき御歌會は聖上御風邪にて御延引の處三條公爵薨去に付又た御延引相成居れども遠からず御施行あるよしに承る。

女報

ふみ子編

○小學の英語科　高知縣土佐郡第一高等中學校にては、かねて英語科存廢のとにつき、教員中に議論ありしが、先づ全體の處は本年七月の、大集會を待つて決することとし、先づ女生徒の一年二年兩級だけは、斷然廢することに、決定したりと。

○束髮は國体を損す（然るか）　去る十五日教育會に上州桐生町小學校の女教師九名は各々白襟紋附に威儀を正し何れも束髮の粉裝にて來會せしが當日學習院教授峯是三郎氏は大に束髮の不体裁を論じ遂に國體を損するとと云ふに至りしかば翌日より悉く日本風の結髮に改め登校せしがば女生等は皆な之を見倣ひ今は桐生町に一人の束髮女を見ざるに至りしと、束髮果して國体を損するか、左らば耳の教授の頭は如何、結髮か、散髮か、是吾人の大に聞かんと欲する所なり。

○子守學校　長野縣植科郡屋代學校内に設けたる、子守科にては、昨今七十四名餘生徒あり、毎日一時間づゝ之れに、簡易なる學科、優美なる數へ歌等を授けしに、開校后未だ時日を經ざるにも拘はらず、子守の風習大に在來の面目を改めたれば、學校職員等も大に喜び、爾后一層此科を擴張せん計畫なりと。

○大日本婦人教育會　同會は去る廿一日午後一時より小石川同人社樓上に於て例會を開きたり同會長毛利公爵夫人は事故ありて缺席せしが副會長毛利子爵夫人初め會員數十名出席し席上には元寇に關する古器物、卷物、繪畫を陳列して湯地丈雄、古谷滿二郎の兩氏之に係る演說說明を爲し次に鈴木弘恭氏の演說あり夫れより會員諸氏の雜談ありて五時過散會せし由。

○刺客長連豪の妻女　顧みれバ十三年前の昔時の內務卿大久保利通君を紀尾井坂に刺し身ハ市ヶ谷監獄刑場の露と消えし石川縣人長連豪氏の妻女綾子（三十年）ハ連豪氏在世の時夫と共に石川縣高尾村へ移住し數歩の田畠を購ひ自ら農事を勤め其後連豪氏の罪を獲て刑せらるゝに及び剃髮して尼となり其實家なる森氏の父母を己が居村に引取りて孝養怠りなく身ハ節操を守り月々亡夫の忌日にハ必らず野田山なる連豪氏の墓所へ參詣し香花を手向て其冥福を祈り十數年一日の如く毫も怠る色なく又居常村內の婦女子を集めて女の守る可き道を訓ふるなど訓誨と佛事との外亦餘念なき者の如しと其れが爲め村內ハ素より近鄉近村皆其德を慕ひ來りて訓誨を受けんとする者續々絕ずえと讀賣新聞に見たり。

○明治女學校卒業式　去る廿一日午后六時麴町區下六番町六番地明治女學校に於て第二回卒業式を擧行せり來賓二百餘名あり、午后九時靜肅に式を終へたり、卒業生中速記科の女生四名は、嚴本教頭の報告を速記し、直に之れを飜譯して蒟蒻版に摺り、來賓の散ずる時土產として頒ち與へしに、何れも其敏腕を、賞して止まざりしと。

○獨立女學校音樂會　獨立女學校にては、本月廿八日、芝彌生館にて音樂會を催ふし、其收入を以て、全校增築の費用充つる計畫にて、汎く有志者の來會を許すよし。

○華族女學校は　三條公爵薨去に付、弔意を表するため十九日より廿一日迄、三日間休校したり。

○衆議院の婦人傍聽席　衆議院の假議場には、傍聽席の手挾なる爲め、別に婦人席の設けなかりしが去る廿一日より、貴族院議員傍聽席內に、白繩を張りて、一席を設けたりといふ。

○布哇皇帝の御卽位　布哇先帝の妹り、ウオカリニは全國皇帝の位に卽かせられたる旨、在全國本邦領事より、外務省へ通報ありたりと。

○世界有名の唱歌女日本に來るべし　英國のマダムペチーといへば當時世界隨一ともいふべき唱歌の名人にして一唱萬金に價し其の富王侯に比すとは譲て聞及びし處なるが此の女性此の頃東洋漫遊を思立ち目下已に上海にあり遠からず日本へ渡來すべき筈なりと。

○米國動物逆待保護會　の會長ヨーソン氏は此度ナイトに叙任されたり。

週報

官令　三條公爵薨去に付二月十九日より三日間廢朝仰出さる○全日全公爵國葬の件裁可せらる。

政治　廿日立憲自由黨代議士總會を事務所に開く○廿一日非地價修正全盟大懇親會を江東中村樓に開く。

雜報　○去廿二日日本鑛業會總會を開く○廿一日監獄評議委員たる、大浦警保局次長、大森縣次局長、大島文部大臣秘書官、等十數名の諸氏、石川島監獄役場を巡視したり○廿八日工學會を西紺屋町の地學協會に開く。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

品名	二月廿五日
白米（一円ニ付）	
一等米	九升八合
二等米	一〇二
三等米	一〇五
四等米	一〇八
五等米	一一一
正米（一円ニ付）	
越中米	一斗四升三合
美濃米	一四〇
尾張米	一三七
肥後米	一三五
一志米	一一七
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗二升二合
上州小麥	一五〇
竹林麥	一三〇
梅澤大豆	二〇〇
青柳大豆	一九五
吟小豆	一四〇
白胡麻	一二〇
黒胡麻	一五〇
鹽（一円ニ付）	
赤穗	二俵六二
大坂	二七
本齋	四一七
新齋	四五〇
醤油（一樽ニ付円）	
最上	[illegible]
極上	九五
上物	一四〇
中物	一九〇
並物	二四〇
味噌製（上ニ付円）	
地白	八、五〇〇
同上赤	六、五〇〇
紅赤	九、〇〇〇

品名	二月廿五日
綿（九貫目ニ付）	
上入金	三四、〇〇
並入仝	二七、〇〇
無銘	二二、〇〇
絹糸（一…ニ付円）	
本練花色	二、五〇
色物上々	二、四〇
赤白同	二、四五
井子糸同	二、六〇
湖色上々	二、三五
色物太練	二、五〇
羽二重糸	二、四〇
紡績器械糸	四、三五
毛糸（一…ニ付）	
四判	九、〇〇
染分	九、〇〇
中細	一三、〇〇
極細	一三、〇〇
靴下用極上	一二、〇〇
木綿織物（一反ニ付）	
佐織紺織	六、〇〇
納戸織	四、八〇
生棧縞	一、一〇
美濃黄八円	二、七〇
大和黄八丈	二、二〇
さび八丈縞	二、二〇
美濃双子	四、〇〇
物産縞	六、〇〇
糸入愛國縞	八、〇〇
京浙化色	二、六〇
和糸紅花染	一、八〇
裏地絹（一疋ニ付円）	
糸吉絹	七、二〇
秩父絹	四、三〇
本紅絹	六、二〇
色甲斐絹	五、七〇

品名	二月廿五日
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稱頭	二、四五
同大頭	一、九五
同小頭	一、六五
同中茶	二、一五
狭山稱頭	一、七五
同大頭	一、四〇
同中頭	一、二五
鰹節（一貫目ニ付）	
薩摩大	一六、〇〇
伊豆上	一七、五〇
城ノ腰	一七、〇〇
遠州上	一六、五〇
房總上	一四、〇〇
銚子上	一三、五〇
土佐大	一〇、〇〇
炭（一俵ニ付円）	
伊豆上	四、五〇
同中	四、八〇
同下	五、五〇
丸備上	二、一〇
角備上	二、八〇
土釜	七、五〇
切炭	七、〇〇
水油（一樽ニ付）	
地水	八、五〇
胡麻	一〇、一〇
荏油	一〇、八〇
桐油	六、六〇
綿油	七、六〇
坂水	九、五八
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	一、六六
デポース	一、六五
ホーキス	一、七二
ロイヤ	一、六三

女學書類發行

女學雜誌社編輯

家庭廉價 子供の談

紙數八十葉 郵稅なし 定價十二錢

右は子供の爲にある好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舎音樂師。第二、龍の君。第三、旅と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とダヽイヤ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔馴なる娘。第十、英雄の所業。第十一、まましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾深。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も悪き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮

紙數六十七葉 郵稅なし 定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人書面紹介の事。婦人案内の事。散歩、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を過する事などに分ち。西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理

紙數百九十葉 郵稅なし 定價廿五錢

右は、月經の事。懐妊の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を説き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和書案内

紙數百廿葉 郵稅なし 定價五錢

右は八木兼辰氏の講述にかゝるものなり

兒育て草

紙數百六十葉 郵稅なし 定價二十錢

右は育兒の心得を、問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々説明し、母として子を育つる總ての心得を悉とく講述したり。

邦文學

紙數百六十葉 郵稅なし 定價二十錢

右は同志社教師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に説明したるもの也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

理化學的應用實効

三能 色を白くするしやぼん

定價一個十錢より

○抑此しやぼんは第一身躰の色を白くし。御顔の艶を出し。第二肌のしみ又はにきびそばかすをとり。第三種々のふきでもの、靨を消すべき大効あり。故に名づけて三能しやぼんと云ふ。常に御用ひなされ候へば色を白くすること雪をも欺むく計りにして。性來色黒き肌。又は何となく色悪しき肌の御方始め自然に出來たる肌のしみ腫物の跡に至る迄御用ひなさるうち知らずしらず消えて艶美なる御肌になること疑なし。殊に諸傳染病の看病人などは常に之れを用ひ身躰を洗ひなば其感染を防ぐことを受合あり御試用の上與に三能しやぼんの名に背かざるを知り賜へかし。

●みづむし●糸かせ●いんきんたむしは常に御用ひなされ候得ばしぜんになをります。

製造人 西條重兵衛 倘くはしくは本能書にあり。

發賣元 東京銀座一丁目 **佐々木玄兵衛**

特約販賣所

日本橋區通二小間物店 柳屋
同村松町丹水 岩瀬及蔵
同兩國廣小路五臓圓本舗 大木口哲
同瀬戸物町藥種問屋 玉置金八
同元大坂町清錦湯本舗 高木與兵衛
同上槇町萬金膏本舗 安川榮次郎
同馬喰町一丁目小町水 平尾賛平
同本石町二丁目十軒店 森谷萬次郎
同横山町一丁目洋物店 楢ゞ屋商店
同同町小間物問屋 近江源七
同坂本町角賣藥店 徳田多助
同新右衛門町賣藥店 はたや
同親父橋角芳町 堺屋武助
同通一丁目木原店席亭向 丸れこ
同芝神明鳥居内藥舗 岩木新兵衛
麻布區飯倉三丁目洋物店 宮島
同六本木町洋物小間物店 木村屋
同長坂町保玉散本舗 堀井
赤坂區一ツ木町角洋物 小間物店 松下
同同町洋物小間物店 和泉屋
四ツ谷傳馬町小間物問屋 山形屋
同十三丁目[illegible]舗 河合治兵衛
同大通角小間物紙店 相摸屋
麹町區麹町三丁目藥舗 田縣重兵衛
同同町小間物店 藤田屋
同三番町藥舗 雨宮藤吉
小石川諏訪町一等散本家 花樂堂
本郷區眞砂町藥舗 尾澤蒼生堂
下谷池の端仲町寶丹本舗 守田
同外神田富松町寶丹支店 長尾
同天神町一丁目寶丹支店 柳澤
同東坂町櫻香油本家 堺屋[illegible]兵衛
淺草區駒形町小間物店 中島屋百助
同黒船町樂屋洗粉本家 梅素亭
同西三筋町角小間物店 鶴屋淺吉
同公園凌雲閣五階目出品 岩濱
同新銀町一番地子宮玉本舗 清水
神田區柳原通富松町寶丹支 店伴岱蔵
同小川町銀杏木前藥舗 笠井資生堂
同五十稲衛前藥舗 知新堂
同同ヶ入口角洋物店 信盛堂
同錦町一丁目小間物店 西野小平
京橋區銀座二丁目 岸田吟香
同三丁目萬金丹本舗 ㊇藥店

同南傳馬町一丁目 伊勢屋寶兵衛
同竹川町角小間物店 丸屋松五郎
同八丁堀入通小間物店 和泉屋
同元數寄屋町三丁目藥店 結城屋
同築地二丁目賣藥店 近江宗兵衛
同入船町四丁目角[illegible]店 橋本均一
芝區之門一丁目十五番地 はしや
同櫻田伏見町角小間物紙店 豐田屋
同久保町突番所角 大菱堂
同佐久間町一丁目角紙店 服部
同櫻川町藥舗 保生堂
同西ノ久保花手町藥舗 山崎日進堂
同櫻田嶋前町毛利郎前店 梅田
神田區沿染舘紙石檢 松[illegible]堂
同表神保町二番地藥舗 教生堂
同同洋物小間物店 享榮堂
同南神保町化粧品專賣店 おきなや
同一ツ橋通町七番地 北信堂
同同八番地 橋本吉助
同淡路町二丁目藥舗 眞璧
同猿樂町一[illegible]便取扱所 吉付
同鍋町大通藥舗 中澤條助
同同町大木町店 齋藤辰造
品川宿停車塲構内洋物店 淺子
品川宿洋物小間物店 相川
●横濱尾上町四丁目藥舗 鈴本
●同賑町一丁目賣藥舗 里見亭太郎
●同伊勢崎町洋物店 小池金次郎
●同太田町四毛糸編物所 山田
●同境町洋物小間物店 近榮
●同野毛町一小間物店 吉岡
●同辨天通四丁目角小間物 信濃屋
●北海道函舘末廣町 店新田
●横須賀旭町表門前 豊平屋
●同汐入町賣藥店 山本賀平
●同大瀧町洋物店 松本源次郎
●相州大磯茶屋町 三宅藤兵衛
●同小田原綠町諸色小間物店 油久
●靜岡紺屋町 日上部源七
●甲府肴町藥舗 村田屋七右衛門
●仙台大町四丁目 高橋藤七
●東海道吉原書物店 佐野屋藤次郎
●大坂市四ツ橋藥舗 本林丁子金
●全安土町四丁目唐物小間物商 大崎組
●神戸元町五丁目 横田藥舗
●熊本市細工町二丁目 紅屋治三郎

右の外藥舗賣藥舗和洋小間物店に取次差出有之候に付御最寄にて御購求御試用の程願上候。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

通信女學

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして猶藝學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉强をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆な學問と云ふことに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代の恩澤にて有がたきこと云ふべし、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進歩目覺しきことなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學するとも出來ず又家に教師を引て教を受るも甚はだ手數あれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何かな家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、本年一月に至り、二ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの七百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第二回の習讀者を募る。

一冊三十二錢。郵税なし。半年、一圓八十錢。一年、三圓五十錢。

女學雜誌社

女子高等師範學校長
文學博士中村正直先生閲並題辭山井道子編述

女子修身鑑 全一冊

半紙本上製書入定價金二圓

目次「卷一」修身大意●教育程度●ベルッ君演說●父母に事ふる道●長幼順序●交際●婦行婦德婦言婦容婦功「卷二」配偶の撰●寡婦心得●夫に事ふる道●舅姑に事ふる道●叔妹及親戚取扱心得「卷三」母親心得●嬰兒教導●女子七八歲よりの教導●男子幼兒教導●繼子を教導する心得「卷四」姑心得●妾心得●乳母心得●下婢心得●家政心得
●中村先生の題辭に我喜玆書出善教彼閨媛可以資見聞可以爲內助可以調兒孫との言あれは世の女子たる者必ず一本を座右に置き朝夕の鑑となし賜はゞ獨り一身一家の幸福のみならんや

賣捌 金港堂 須原屋

發行者 東京牛込區東五軒町十七番地 東條春雄

女子獨立學校校舍增築義捐

音樂會

以來毎月一回催うするとし、本日其第一回を催す、細事は本號の女報內に見ゆ。

發起人 加藤弘吉 加藤泰常

贊成員

子爵 樺山トモ子 田村直臣 押川方義 瓜生シゲ子 ミスパラ 渡瀬カメ子
神田クマチヨ子 島田マサ子 植村正久 巖本善治 加藤勝彌 岡山トシ子
世良田亮 種田シゲ子 稻垣秋子 岡見ケイ子 ミセスツルー

東京市京橋區弓町廿一番地
女子獨立學校校舍增築義捐音樂會事務所

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

北海孤兒院創立規則摘要并ニ義捐金募集

第一條　我儕ハ北海道ニ於テ一ノ孤兒院ヲ設立シ本邦無告ノ孤兒ヲ育養シ北海孤兒院ト稱ス
第二條　本院ハ北海道膽振國虻田村字「ユナルカ」ニ設立ス
第三條　本院ハ慈善家ノ寄付金ヲ募リ「ユナルカ」ノ地三百萬坪ヲ開墾シ其收益ヲ以テ維持スルモノトス
第四條　本院ハ品行方正身躰強壯ニ〆飲酒ヲナサヾル小作人百戸ヲ招集シ開墾ヲ爲シム
第五條　本院ハ十五ケ年ヲ以テ其開墾ヲ成功スルモノトス
第六條　本院ノ要スル豫算ハ金貳萬九千〇六拾八圓ナリ
第七條　本院ハ寄付金ノ種類ヲ分チテ一時皆納數回分納ノ二種トス
第八條　寄付金ノ豫約書ハ創立委員ニ送リ其金員ハ毎年十二月十五日迄ニ創立委員ニ充テタル爲換ヲ以テ北海道膽振國室蘭港三井銀行出張店ヘ向ケ拂込ムモノトス但シ同銀行ヘ拂込ムニ不便利ナル土地ニテハ郵便爲換ヲ以テ西紋鼈郵便局ヘ振込ムモ妨ケナシ

明治廿四年二月

創立委員　北海道膽振國有珠郡黄金蘂村一番地
田村顯允

創立委員寄付金募集擔任　同道同國同郡東紋鼈村百廿九番地
林竹太郎

女學生　第拾號＝廿六日ヨ發兌せり

當號には『女子教育の感を述べ』併せて宣教師各校長に告白す』といふ痛快の文あり
當號には『新年の祝節』といふ艶麗の筆あり
當號には『唐詩選の講義』を掲げ始めたり
當號には『熱海に杖を曳く』といふ時節柄面白き紀行あり
當號には『清風大人の和歌點删』を掲げたり
此他愉快なる詩文及ひ女學生諸子の秀麗愛すべき文甚だ多し

女學雜誌社

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候まゝ**百卷**をば僅に**一圓五十錢**にて前例の如く賣拂ひ可申候、其后欠號を生する分**金一圓の**割にて相そろへ賣捌可申候但何れも一と通りづゝ買入を要する八十冊にて其内撰び取りは斷はり候、右百號より二百號に至る間には、出版の當時世を驚かしたる、「日本の家族」。「浮雲の細評」。「理想佳人」。「理想の紳士」。「家内經濟の大要」。「男女交際論」。「經濟雜誌記者との論戰」。「島田三郎氏米國よりの女界通信幾多」。「無名の英雄」。「戸内の戰化」。大鳥圭介氏、德富猪一郎氏、田口卯吉氏、光明寺三郎氏等の女子教育論。月の舍しのぶ氏が「哲女の卷」。「將來の和歌」。「將來の日本人民」。森有禮氏の「妻妾論」。「櫻花爛熳」。「滿目漠々」饗庭篁村氏が最秀の自作小說とする「昔の夢」。「此大沙漠界一人の詩人あれよ」。「繪畫に於ける國粹保存主義」。「犧牲獻身」。「詩人」。若松しづ子が「忘れ形見」。等の極めて面白き甚だ益あるものを含めり。

第三版

百人一首講義

上製美本　五十錢　郵税六錢
並製倹裝　三十五錢　同　四錢

正月の稽古に宜しく歌留多遊びに宜し
遺物に宜しく詠歌に宜し

女學雜誌社

定價

一冊。	六錢	郵税。五厘	(但府内無郵税)
十一冊。	五拾八錢	郵税。五厘	(同前)
半年分	壹圓四拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

東京市麴町區下六番町六番地
發行所　**女學雜誌社**
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三